
FAIRY TAIL ~ 海龍の二つ名を持つ者 ~

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL 海龍の二つ名を持つ者

【Nコード】

N1118Y

【作者名】

原石

【あらすじ】

水の滅龍魔導士であるリョウマ「ポセイジオはフェアリーテイルの面々に振り回されながらも自分の大切なものを守るために過ごしていく」という大それた名目というハリボテを掲げて今日もリョウマはエルザの尻に轢かれてあっちこっちで大騒ぎをしていく……駄文ですがよろしく願います！

プロローグ（前書き）

リヨウマが奏でるもう一つのフェアリーテイルの世界をご堪能ください！

一つ言っていますが主人公は転サトの主人公とは一切関係ありません。

プロフィール

リヨウマ＝ポセイジオ

18歳

容姿&説明

青髪で微妙にツリ目。容姿はまともだが二枚目とは言われない。身長はエルザと同じぐらいだが、いつも腕一本でねじ伏せられている。

エルザの相棒。だがS級魔導士ではない。

七年前まで海龍シーサラに育てられていたがシーサラが突然姿を消し、孤独の身に。

そんな状態で途方に暮れていたリヨウマをマスターマカロフが見つけてフェアリーテイルに入れた。

魔法名

水の滅龍魔導士

服装

基本的に青いパーカーを着ている。両手にはシーサラがくれた青い指出しグローブを装着。

「うおおおおおおお!!」

今俺の目の前では赤く長い髪を持った鎧装着女が巨大な怪物を蹂躪している。

あ。今ので十体目だなー。

「はあああああああ!!」

十一体目十二体目十三体目……

今だから言うが俺の出番一切なし。

だって近くの岩場に腰かけて水飲める余裕があるぐらいだから。

彼女の名前はエルザ「スカーレット」。

フィオーレ王国最強の魔導士ギルド【フェアリーテイル】のS級魔導士だ。

エルザが所持している魔法の名前は【騎士くザ・ナイト>】。まあ、いわゆる騎士つて奴だ。

エルザの魔法を分かりやすく説明すると早着替えできるお薦めアイテムつてところ。

着替えの手間いらすだな。羨ましい。

「——て、うおお!?!」

俺がポーツと水を飲みながら考え事をしていたら突然顔のすぐ横を

デッカイ剣が通過していった。

今の剣は【黒羽の鎧】とセットになっている剣だな？

つつーことは……

「エルザさん！？ そんな危険なものを人に向けたら危ないっすよ！？」

「だったらお前も働け！ さっきから私ばかり戦ってるではないか！」

「そんなこと言ってもなー。エルザが強すぎて俺の出る幕全くないし」

「……………【換装『海王の鎧』】」

「わー！ 待て待てエルザ！ ストップ！ その鎧は完全に俺を殺しかかってる！」

【海王の鎧】というのは要するに水属性の魔法に対して最強を誇る鎧だ。

水属性の魔法を使う俺にとっては天敵そのもの。災害モンだ。

あ。俺、滅龍魔導士<ドラゴンスレイヤー>です。

あと、属性は『水』。要するに水の滅龍魔導士ってヤツだ。

巷ではカイリユーのリヨウマって呼ばれてる。

は？ ポケモン？ 何それ？ どっかのモンスター？

コホン。話を戻すぜ。

んで、七年前に海龍シーサラに捨てられた俺はフェアリーテイルの三代目マスターであるマカロフさんに拾われてフェアリーテイルの魔導士になったってワケ。

話の変え方が唐突すぎ？ それはアンタの慣れ次第ってことで。つつーワケでそんなこんなの経験をして今の俺がある。

まあ、フェアリーテイルには俺の他に一人だけ同じ滅龍魔導士がいる。

ソイツは火竜イグニールっていうドラゴンを見つけるのが今の目標

って言っていた。

というわけで俺の目標も一応シーサラを探すことってことで。今まで育ててくれたお礼とか言ってるないし。

「はあ！とお！てりやあ！」

「エルザ敵は逆方向！俺は味方！ デューユーアンダスタン！？」

「言語道断！」

「どついう意味だあ————つ！？」

エルザの鋭い斬撃を最小限の動きで回避していく。

コイツとの付き合いは長いから剣の間合いと軌道ぐらい理解している。

気を抜きさえしなけりや当たることはねえ！

『グウオツオオオオオオオオオオ！！！！』

するとまだ死んでいなかったデツカイ角を持ったモンスターが俺とエルザに向かって突っ込んできた。

それに対して俺たちは————

「「邪魔を、するなあああああああああ！！！！」」

ボコオ！

——魔法を使わず拳だけで沈黙させた。

「ふう。クエスト完了だな」

「お前はほとんど何もしていないだろう。これは私の手柄だから報酬は九対一だ」

「ちよつと話し合おうかエルザ君」

俺とエルザのクエストはいつもこんな感じのやり取りで締めくくられる。

結局報酬は八割程度持つて行かれた。

はあ……金銭的に余裕がねえ……

ここはフェアリーテイルのギルド。
そこはいつものように喧騒に包まれていた。

「何か言ったかクソ炎！」

「超うぜえよ変態野郎！」

普段から犬猿の仲で目があったら喧嘩ばかりしている炎の滅龍魔導士のナツⅡドラグニルと氷の造形魔導士のグレイⅡフルバスターが今にも掴みかかりそうな雰囲気でメンチをきりあっている。

「た、大変だあ——！！」

すると、ギルドの共同酒場に彼氏にしたい魔導士ランキング上位ランカーのロキが足をもつれさせながら転がり込んできた。その整った顔の表面には大量の冷や汗が噴き出している。

「どうしたのロキ？」

「エルザが……エルザが帰ってきた！」

「な、なんだってえ——！？」

フェアリーテイルの酒場にいる全魔導士が声をそろえて驚愕した。

一方その頃エルザ達はいつと……

「重え……」

「遅いぞリヨウマ。早くしないと日が暮れる」

「人に荷物持たせておいて随分な物言いだなオイ」

先日クエストで討伐したモンスターの角を依頼主の街の人々が装飾してくれてエルザにプレゼントしたまでは良かった。

でも……そのもらい物を何で俺が運ばにやあなんのだ……

「まったく……それでも水の滅龍魔導士か？」

「いやマジでそれ関係ないっす。だってこの角メチャクチャ重いんだから……」

ハッキリ言っただけ腰痛い。

ギルドに戻ったらすぐに家に帰って惰眠をむさぼってやる。

よし決めた。今日は睡眠デーだ。思いっきり休ませてもらうとしよう。

「なあエルザ。俺はギルドに着いたら家に帰って寝させてもら——」

「——」

「あ。そうだリヨウマ。仕事の成功の報告が終わったら闇ギルドの制圧に行くから準備をしておいてくれ」

ガン！ガン！

思わず地面を拳で殴る俺。

眼からは大量の涙が滝のように流れている。

俺は水系統の魔導士だから水分があるんだよ。滅龍魔導士だし。

滅龍魔導士は自分の属性のものを食べることで魔力を一気に回復することができる。

ナツは炎系統だからいつも火ばっか食べてる。

俺は水系統だが食べるとすれば一番、海水が望ましい。
でもここは内陸なので海水なんか取れるわけがない。

戦いの最中に水を飲めるわけないし。

だから俺は考えた。

どこにいても水を取り込める方法を。

そして俺は思いついたんだ。

空気中の水分を吸収すればいいんじゃないかと。

というワケで二年前にようやく空気中の水分を体内に取り込む修行を終えました。

今では魔力の枯渇知らず。

いやーこれが努力の成果ってヤツだね。エルザには相変わらず勝てねえけど。

「また仕事！？ いい加減休ませてくれよ！ここんとこずっと働きっぱなしで寝不足なんだって！」

「それは私も同じだ。だがな、闇ギルドのせいで弱き市民たちがおびえて暮らしているこの世を正さなくてはならないのだ！」

「それは確かに正論だけれども！なんだろうこのやるせない気持ち！一体どこへぶつけたらいいんだろうか！？」

「【呪歌くららバイ>】」

「はぁ？ 何だよそれ？」

聞き覚えのない名前だな。

「私も詳しくは知らない。しかし昨日寄った酒場でアイゼンヴァルトの連中がその話をしていた」

「俺が必死に宿探ししてた時か……」

エルザの命令で一番高い宿を探し続けていた俺はもちろんその話は知らない。

だつて足がパンパンになるぐらい走っていたから。

「しかし罪無き人に対して良い効果をもたらす魔法ではないことは確かだ」

「まあ闇ギルドの連中が探すぐらいだからな」

お。やつと着いたみたいだなー。

俺の目の前には巨大な建造物がそびえ立っている。

これがフェアリーテイルのギルドだ。

俺がここに入った時から改装すらされていないボロギルド。そろそろ耐えなおしてもしないのかねー。

「とりあえずナツと 그레이 に協力してもらつ」

「……言つこと聞くのかアイツら」

「私に逆らえるような実力じゃないからな。フッフ……」

「エルザさん目がマジで怖いっす……」

出会った当初のエルザは今よりもっとまとまった気がする。

いや顔は今のが美人だよ？

そうじゃなくて俺が言ってるのは性格のこと。

俺と何回もクエストに行っているうちにどっかに頭でもぶつけたんだろつか？

随分と黒い性格になっちゃって……

「そつえばフィアはどうしたのだ？ 今回のクエストにはついてきてないようなのだが……」

「ん？ ああ、アイツね」

フィアというのは六年前に山で拾った卵をドラゴンの卵と間違えて俺とエルザが孵化させた猫の名前だ。

……………うん。今の表現に疑問を持つのは痛いほどわかる。俺とエルザだってしばらく呆然としてたから。ナツも猫の相棒がいる。名前はハッピー。青毛の猫だ。因みにフィアの色は赤。ハッピーとフィアの魔法の名前は「翼<エーラ>」。その名の通り翼を生やして空を舞う魔法だ。その魔法のほとんどは俺とナツを運ぶために使用されている。

「アイツは多分だけど俺の家で眠ってるんじゃないの？ 基本的に面倒事が嫌いなタイプだしアイツは」

「そうか。それじゃあ闇ギルド討伐にフィアを連れて行くことにしよう」

「嫌全く俺の話から繋がる決定とは思えないしそもそもフィアの都合とか考えてないし特に俺の都合も！」

「いや、なのか……？」

「うっ」

俺と身長は同じぐらいのエルザが腰を落としてわざわざ上目づかいで俺を見てきた。ついでに言うのと左目の端には涙が浮かんている。どうせニセの涙だろうけどなあ……。エルザの右目は義眼だ。理由は知らない。エルザが教えてくれないからな。

俺は昔からエルザの涙が苦手だ。それは多分俺がエルザのことを好きだからだろうな。

好きな奴の涙は見たくない。そんなの常識だろ？

「いやじゃ、ない……」

「そうか！それはよかった！ならばともに正義の道を進もうではないか！」

「おー」

ほらやっぱりニセモノだった。

「うん。やはり持つべきものは相棒だな」

「そうですかー」

「では、早速入るとするか。我が家に」

「へーい」

俺とエルザはフェアリーテイルのギルドの中に入っていた。

プロローグ（後書き）

「もう、いや……」

By リョウマ

最強チームの結成（前書き）

「燃えてきたぞ！」

B
y
ナツ

最強チームの結成

「今戻った！マスターはおられるか！」

ざわざわ…

エルザがギルドの中に入った途端に酒場が騒然となった。
相変わらず恐れられてますねエルザさん。

「た…ただいま…」

ドンッ！！

エルザに遅れてギルドの中に入ってきた俺は酒場に着くなり背負っていたモンスターの角を床に置いた。
あー肩、痛え。よくまわしとかないと。

「な、なありヨウマ。そのデッカイの何だ？」

すると俺の傍に立っていたフェアリーテイルの仲間がそんなことを聞いてきた。

いやまあ確かに気になるでしょーね。

「俺とエルザで討伐したモンスターの角だ。地元の人が綺麗に飾りを施してくれてなあ。エルザが綺麗だからってここまで運んできたんだ。酒場に飾るらしいぞ？」

「マジかよ……」

「っていうかどんなサイズだよ……」

うん。俺だってその反応がしたかったさ。
自分が討伐したモンスターじゃなければ……

「それよりお前たち。また問題ばかり起こしているようだな。マスターが許しても私は許さんぞ」

「いや少しは手加減してやれよ……？」

「な……なにこの人たち……」

「鎧を着ている方がエルザで全体的に青いのがリヨウマ！二人ともすごく強いんだ！それにリヨウマは水の滅龍魔導士なんだよ！」
「へえ。ナツ以外にも滅龍魔導士がいたんだ……」

ん？ ハッピーと話してるのは誰だ？ 見ない顔だな……新人か？

「カナ……なんという格好で飲んでいる」

「う……」

「ビジター、踊りなら外でやれ。ワカバ、吸いながら落ちているぞ」

エルザの言葉に踊りをやめるビジター。

ワカバにいたっては吸いがらを手で集めてゴミ箱に運んでいる始末。
確かにこりゃ酷いな……

「ナブ……相変わらず依頼板の前をウロウロしているのか？ 仕事をしろ」

「エルザ、そこら辺にしといてやれって……」

ナブが心の底から悲しそうな顔をしてるからさ。

「まったく……世話が焼けるな。今日のところは何も言わずに置いてやろう」

「結構言ってますけどー？」

「ああ？」

「ゴメンナサイ。すべてエルザさんが正しいです」

「一瞬で敗北しちゃった！？ あの2人ってチームじゃないの!？」

「それがチーム【ドラグリーン】の実態です」

オイコラハッピー今すっごく聞き捨てならないセリフが聞こえたぞコラ。

するとエルザがハッピーの方を向いて数歩進んだ。

ん？ 早速あの話をする気か？

「ところでナツとグレイはいるか？」

「あい」

今自分の相棒を裏切りやがったぞこの青猫。

「や……やあ、エルザ……オ……オレたち今日も仲良し……よく……や……

……やってるぜい」

「あい」

「ナツがハッピーみたいになった!？」

新人さんの言うとおり、ナツがハッピーの口癖を言うだけの人形になっってしまった。

そこまでエルザって怖いかな？

「そうか……親友なら時にはケンカもするだろう……しかし私はそうやって仲良くしているのを見るのが好きだぞ」

「あ……い、いや……いつも言ってるけど親友ってわけじゃ……」

「あい」

「こんなナツ見たことないわ!？」

俺は帰ってくるたび見てるけどな。

ハッピー状態のナツと無駄にかしこまった 그레이 の姿。

この二人のエルザ恐怖症は相当なもんだからな。

「そうか。ところで実は二人に頼みたい事がある。リヨウマ」

「はいはい。今回の仕事先で少々やっかない話を耳にしてしまったんだ。本来ならマスターの判断を仰ぐトコなんだが早期解決がのぞましいと俺とエルザは判断した」

「二人の力を貸してほしい。ついてきてくれるな？ 私とリヨウマに」

ざわっ

エルザの言葉にその場が騒然となる。

そりゃそうだ。普段から俺と二人でしか仕事に行かないエルザがフェアリーテイル内でもトップクラスの力を持つナツと 그레이 に頼みごとをしたんだから。

まあ、事情が事情だししょうがないか。

「出発は明日だ。準備をしておいてくれ」

「え…ちょ」

「エルザ!？」

ナツと 그레이 の言葉を全てシカトしながらエルザは住居であるフェアリーテイルの女子寮に戻っていった。

その場に残された俺たちはしばらく黙りこんでいた。

まあ、状況がつかめなかったし。

「おいリヨウマ！どんだけヤバい仕事なんだよ！？」

「なんで俺がこんな変態野郎と一緒に仕事に行かなきゃいけないんだ！！」

「知るか！エルザの独断だ！」

「「独断！？」」

「エルザって独裁者？」

「あい。似たようなものです」

「クソッ。こんなヤツと一緒に組むってだけでも吐き気が出るのに……」

「んだとコラア！？」

「やんのかクソ炎！」

「上等だクソ脱衣魔！」

「いい加減にしろ！！」

ゴイン！！

あまりにナツと 그레이 の言い争いが面倒くさかったので魔力を少し込めたゲンコツで沈黙させる。

圧縮はしていないので二人の皮膚が切り刻まれることは無い。水って圧縮するとなんでも斬れますからね！。

「んじゃ俺も帰るわ。また明日なー」

俺はそう言い残して自分の家に向かって歩いて行った。

「リヨウマにエルザにナツに 그레이 ……これは最強チームになるかもね……」

ミラが何かつぶやいていたが俺の耳にはよく聞こえなかった。

俺の家はギルドから歩いて数分のところにある。
見た目も中身も何の変哲もない一軒家。

位置的にはフェアリーテイルの女子寮の近くだ。

別に俺が望んでココに作ったわけじゃない。だってこの家はエルザからプレゼントされたものだから。

確か俺がフェアリーテイルに入ってからちょうど一年たちましたよ記念
かなんかだった気がする。

昔からアイツはサプライズ精神満点だったからなあ。

がちや

「……………おかえり」

俺が家の中に入ると玄関に真っ赤な毛並みの猫が立っていた。

コイツが例の猫であるフィア。

俺とエルザが孵化させた猫だ。

「ただいま。ところでフィア、明日は暇か？」

「……………別に何も用事は入ってない」

「そりゃよかった（ニヤニヤ）」

「……………なんだそのニヤケは……………」

俺のにやけた顔を見て思わず二三歩後ろに後ずさるフィア。そんなフィアを見て俺はさらに笑みを深くしてこう言った。

「明日はエルザと一緒に闇ギルドの討伐だ」

フィアはその場から逃走しようとしたが俺によってすぐにとらえられた。

道連れは多い方が良い。

つつーわけで作ってきましたマグノリア駅。

今、俺の隣では荷物を全部俺に押し付けたエルザがフィアを抱いてもふもふしていた。

もちろん鎧は着ていない。フィアの毛の感触を味わえないからだ。

「久しぶりだなフィア！元気にしてたか？」

「……………まあまあ」

「相変わらず愛想のない奴だがこの感触がたまらん！」
「……………エルザ、苦しい」

今のフィアはエルザが思いつきり抱き寄せているのでエルザの豊満な胸に顔が埋まっている状態だ。
代わってくれないかな……………うらやましい。

「エルザではなく【お母さん】と呼んでくれていいんだぞ？ お前は私とリヨウマの息子だからな！」

「……………随分と若い母親だな……………」
「っ／／／／」

エルザのヤツどんだけ古い話題を引つ張り出してくるんだ……………
今エルザが言ったことは俺とエルザがフィアを孵化させたばかりのころにエルザがふざけて言ったことだ。
何故か顔が真っ赤だったけど。

「エルザさーん？ そろそろいかないと乗り遅れちゃうぞー？」

俺たちの目の前にはメンチをきりあっているナツとグレイと遠目でそれを見ているハッピーと例の新人さんがいる。
おそらく俺たちが来るのを待っているんだろう。

「それはそうなんだがこの感触をもう少しだけ味わっておきたい」
「味わっていいから列車に乗ろう。マジで乗り遅れるから」
「分かった」

やっと言うこと聞いてくれたよ……………エルザの手綱はしっかり握っておかないといつ暴れだすか分かったもんじゃない。

「荷物多っ!？」

俺たちがみんなのところに行くとな新人さんが俺が引いている滑車を見てそうツツコんだ。

ま、まともな新人だ…… やつとあのギルドにも常識人が……!

「ん? 君は昨日妖精の尻尾くフェアリーテイルくにいたな……」

「! 新人のルーシイといます。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしくおねがいします」

エルザの問いにルーシイはぺこりと頭を下げて自己紹介をした。

礼儀正しい。やっぱりまともな人間のような。何故か親近感がわく

……

「私はエルザだ。こっちは私の相棒のリョウマ。そして今私が抱いているのが私たちの息子のフィア。いつもは私とリョウマとフィアでチーム「ドラグーン」を組んで仕事に行くんだが今回は事情が事情だ。よろしく頼んだぞ」

「どうも。水の滅龍魔導士のリョウマだ。フィアが息子っていう発言はスルーしてくれて構わない。コイツの戯言だから」

「戯言だ?!？」

「…………… 話が進まないから少し黙ってる。オレはフィア。そのハッピーと似たようなものだと思うてくれればいい」

「ということは背中から羽が生えたりするの?」

「フィアの【翼くエーラく】は凄いいんだよ! オイラよりも速く飛べるんだ!」

「…………… 魔法はコツさえつかめればどこまでも上達する。ハッピーもそれさえ掴めればオレより早く飛べるさ」

「大人!!! この猫ちゃんすっごく大人ね!」

「…………… な、撫でるな……………」

ルーシイに手を振り払ってエルザに抱き着くフィア。
いやマジで変わってくれませんかフィアさん。

そのポジションに一度でいいから触れてみたいっす！

「なあエルザ。今回の仕事について行く代わりに一つ条件を付けて
良いか？」

「条件？ 言ってみろ」

「この仕事が終わったらリヨウマとエルザと決闘させる。次こそは
負けねえ。あの時とは違うんだ」

「！！！！」

「お、オイ！はやまんって！」

「だ そうだ。俺は別に構わねえけどエルザは？」

久しぶりにナツと決闘したいとは思っていたからなー。

新技も試したいし。

「ふっ。いいだろう。本気で相手してやる。 그레이はどうする？」

「（ブンブンブンブン！）」

首が取れるんじゃないかなろうかという錯覚を覚えさせるぐらい首を横
に振る 그레이。

そんなに戦いたくないのか…… まあ、 그레이は俺に相性悪いからな。

「よし！ 燃えてきたあ——！！ やってやるっじや
ねえか！！」

ナツが体中から炎を吹き出してマグノリア駅中に響き渡るぐらいの

大声で歓喜した。

最強チームの結成（後書き）

「べ、別に私はリョウマのことなどっ／＼／」

B y エルザ

列車の中の出来事（前書き）

「……………はあ
」

B
y
フ
イ
ア

列車の中の出来事

「もう列車なんか乗らねえ……」

先ほどの威勢はどこにいったのか列車に乗った途端にナツがグロッキー状態になってしまった。

相変わらず乗り物には弱いようだな。

どうやったら乗り物酔いって治るんだろう？

「ナツうつとうしい。お前はもう列車に乗るな。走れ」

「いやそれは無理だから」

「ナツって相変わらず乗り物に弱いわよねー」

俺とエルザが仕事に行っている間にナツと何度も仕事に行っていたらしいルーシイがニヤニヤしてナツを見ながらそう言った。
あれ？ この子って意外とスっ気があります？

「しょうがない奴だな。私の隣に來い」

「あい……」

「どけてることかしら……」

何イ！？ エルザがナツを自ら自分の隣に誘うだとオ！？

いや落ち着け俺。あのエルザのことだ。どうせナツを乗り物酔いの苦しみから解放するために――

ぼこおっ！

「ぐはあ！？」

——意識を刈り取るだけだろうから。

「ん？ どうしたリヨウマ。なんで私の顔をじっと見ているんだ？」
「その状態のナツを膝枕でもする気なんか？」
「ああ。ま、まさか……お前も膝枕がしてほしいのか！？／／／」
「違うわばけえ！子供じゃあるまいし！しかも顔を赤く染めるな！」
「（怒）」

一瞬

その言葉でしか表せないほど速く、エルザはボディブローで俺の意識を刈り取った。
な、なんで……？

「ルーシィ、ナツを頼んでもいいか？」
「は、はあ……」

リヨウマの鳩尾に文字通り鉄拳（箆手を着けているから）を食らわせて膝枕することに成功したエルザはこれまたいろんな意味でグ

ロッキー状態のナツをルーシーに渡す。

ルーシーは自分の隣に一人分の隙間が開いていたのでそこにナツを寝かせて膝枕をする。

その光景の一部始終を目の当たりにしていたグレイ、ハッピー、フイアは静かに心の中で合掌した。

「そういえば私ってナツ以外の魔法を見たことないなあ。リヨウマさんとエルザさんってどんな魔法を使うんですか？」

「エルザの魔法は凄いいんだよ！相手の血がいつぱい出るんだ！」

「それはキレイというのかしら……」

「……………ハッピー、それはキレイとは言わないぞ」

「別に私もリヨウマも【さん】付けしなくてもいい。なんだか歯がゆいからな。リヨウマの魔法はナツの水バージョンと思ってくれればいい。ナツとの違いと言ったら属性と攻撃の種類ぐらいだからな。コイツの滅龍魔法はナツのように殴るではなくてどちらかというと

【斬る】だ」

「斬る？ 水なのにな？」

「ルーシー、水を圧縮するとどうなるか分かるか？」

「えっと……水圧が上がるんじゃないかしら？」

「そう。リヨウマの使う滅龍魔法は主にその性質を生かした魔法なんだ。まあ、リヨウマの場合は攻撃よりも防御の方が得意だがな。だからいつも私はコイツから守ってもらってばかりだ」

「防御？なんで？龍の迎撃用の魔法なんですよ？」

「……………リヨウマは滅龍魔法によって水の圧力を限界まで上げることが出来るからほとんどの攻撃を防ぐことができる」

「リヨウマの前では私の攻撃も歯が立たん。まったく…こいつは強いんだか弱いんだか……」

エルザがリヨウマの髪を指で梳きながら微笑を浮かべて呟いた。気絶させられたリヨウマは何故か無邪気な寝顔を浮かべている。

連続の仕事続きで疲労しているようだ。

「へえ。で、エルザはどんな魔法を使うの？」

「私の魔法は見ても全く面白くないぞ。それより私はグレイの魔法が一番きれいだと思うがな」

「グレイの？」

「そんな大層なもんじゃねえよ」

そう言つてグレイは自分の前の両手を出して左手の甲を下に向け、その上に握った状態の右手を置く。

すると、グレイの右手と左手の間から冷氣のようなものが漏れ出した。

そして――

「まあざつとこんなモンだろ」

――グレイが右手をどかすと左手の上にフェアリーテイルの紋章の氷像が鎮座していた。

そう。グレイは氷の造形魔導士なのだ。

「うわぁ！すごい！っていうか氷って……似合わないわね。ぷぷう」

「ほつとけ」

「ん？ ちょっと待つてよ……ナツとグレイ……火と氷……ああ！だからあんたたちって仲が悪いのね。子供みたいでかわいいー」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろそんな事ア！」

図星を突かれたグレイは顔を赤く染めて窓の外に視線をやった。そしてこの後ルーシィがエルザにとんでもないことを言い出す。

「あ、そうだ。ねえエルザ。昨日から気になってたんだけどリヨウマとエルザって付き合ってるの？」

「ッ！？／／／ ごほっ！けほっ！」

ルーシイの何気ない質問に飲んでいたコーラをのどに詰まらせるエルザ。

喉と胸を抑えて悶えている。

しかし、エルザの顔が赤いのは呼吸困難のせいではないだろう。

「きゅ、急に何を言い出すんだ！」

「だってリヨウマとエルザって昔からチーム組んでるんでしょ？
ねえどこまで進んでるの？ A？B？もしかしてC？」

「すまないルーシイそのアルファベットは一体どんな意味なんだ？」

「あー……知らないパターンね。じゃあ言い方を変えるわ。リヨウマとエルザってキスしたことある？」

「……（ば、バカルーシイ！その話題はエルザに振っちゃだめだ！
！）」「」

先ほどから黙り込んでいた一人と二匹が顔を青ざめさせて、同時に心の中でルーシイに訴えかけていることなど知る由もないルーシイはエルザの回答をニコニコと笑顔で待っていた。

「き、ききききききキス！？ べ、別にしたことでもないではないがしてしまったこともあったりなかったり……／／／」

「どっちなのよ」

「っ！／／／（かあゝっ）」

「……………エルザとリヨウマは今年のエルザの誕生日の日にキスしてた」

「「ファイア！？」」

「な、なななななななな」

「グレイ隊長！エルザが壊れました！」

「お、俺に振るな！と、とりあえずほっとけ！」

フィアのしれつと暴露に耳の先まで真っ赤に染めたエルザは意味不明な言葉を発しながら混乱してしまった。

その周りではフィアの予想外の行動にテンションがおかしくなっているグレイとハッピーを苦笑いで見ているルーシイがいる。

「へえ……（ニヤツ）　ねえフィア？　二人はこういう流れでキスしたのお？」

「……………エルザが『誕生日のプレゼントはリヨウマのキスが欲しい』と言ったのでリヨウマが顔を真っ赤に染めぐっ！？」

——（くたっ）——

更にエルザの黒歴史を暴露しようとしたフィアの首元に手刀を決めて気絶させたエルザはハッピーに向かってその亡骸を放った。

「まったく……フィアの冗談にも困ったものだ。つい調子に乗ってあることないこと言ってしまう」

「……ホントはそれ以上まで行こうとしてたくせによく言っぜ……」

……

「ああ！？」

「はいスイマセン僕が悪かったです生きててごめんなさい」

「瞬殺ね！？」

ぼそつと文句を言ったグレイはエルザの一睨みでその場に土下座を決める。

フェアリーテイルにはこうした上限関係が構築されているのだ。

「そ、それより本題に入らない？」

「賛成だな。つーかエルザ、今回は一体何事だ？ お前みたいなバケモンが人の手を借りたいだなんて よほどだぜ」

「そうだな……話しておこう。つい先日のことだ。私がリヨウマの宿探しを待っている間の話なのだが――」

そしてエルザは酒場であつた話をルーシィ達に話した。

その話を聞き終わったルーシィとグレイは話に出てきたひとつの単語に疑問符を浮かべる。

「ララバイ？」

「子守唄……眠りの魔法か何かかしら？」

「分からない……しかし封印されていると聞くとかなり強力な魔法だと思われる」

「話が見えてこねえなア。………得体の知れねえ魔法の封印を解こうとしてるやつらがいる……ただそれだけだ。仕事かもしれねえし何て事アねえ」

確かに今の話だけを聞いた限りだとグレイの言うとおり気にするようないふことじゃないだろう。

ただのちんけな闇ギルドが封印されている強力な魔法を解こうと必死になっているだけだ。

しかしこの後のエルザの言葉を聞いてその余裕は一瞬で吹き飛ぶこととなる。

「そうだ。私も初めは特に気にしていなかった………エリゴールという名前を思い出すまではな」

ポォー

カンカンカン

エルザの言葉に続く形で列車が走る音がその席に響いていた。それはその席が静寂で包まれているということを表していた。

「魔導士ギルド【鉄の森<アイゼンヴァルト>】のエース 死神 エリゴール」

「し…死神!？」

「暗殺系の仕事ばかりを優先して受け続けた結果ついた字だ。本来、暗殺依頼は評議会の意向で禁止されているのだが鉄の森は金を選んだ」

列車から降りながら巨大な滑車を引いたエルザはルーシイ達に話を続ける。

「結果…6年目に魔導士ギルド連盟を追放……現在は闇ギルドというカテゴリーに分類されている」

「や、闇ギルドお!？」

「ルーシイ、汁いっぱい出てるよ？」

「汗よ!！」

エルザ達が帰ってくる前に闇ギルドのことをミラジーンから聞いていたルーシイは体中から冷や汗を出して恐怖する。

「なるほどねえ……」

「ちよつと待って!追放って…処罰はされなかったの!？」

確かに暗殺の依頼ばかり請け負っていたという罪があるなら処分程度の罰ですむはずがない。

「されたさ。当時、鉄の森のマスターは逮捕され ギルドは解散命

令を出された。しかし、闇ギルドと呼ばれるギルドの大半が解散命令を無視して活動し続けているギルドのことなのさ」

「……………帰ろっかな……………」

「出た」

駅の出口に向かって歩き出そうとするルーシーにハッピーが鋭いツツコミを入れる。

フィアは何故か考え込んだような表情でそこに浮かんでいる。

「不覚だった…あの時エリゴールの名前を思い出していれば……………」

……………全員血祭りにしてやったものを……………」

「ひいっ！？」

怒りに満ちたエルザから放たれる黒いオーラに鳥肌を浮かべて恐怖するルーシー。

今のエルザの背後には間違いなく修羅が降臨しているだろう。

「だな……………その場にいた連中だけならエルザだけで十分だったかもしれないねえ。少し待てばリョウマも加勢に来るだろうからな。だがギルド一つ相手ともなると……………」

그레이の現実的な一言に小さく頷くエルザ。

エルザだって自分の実力ぐらい理解している。

たった一人で一つのギルドを潰すという子尾が難しいことぐらい分かっているのだろう。

まあ、無理ではなくて困難と思っている辺りがエルザがいかに強いかを物語っているのだが……………」

「奴らはララバイなる魔法を入手し何かを企んでいる。私とリョウマはこの事実を看過する事は出来ないと判断した……………鉄の森に

乗り込むぞ」

絶対に悪を許さないエルザが真っ直ぐな瞳でグレイたちを見つめた。そしてグレイはその言葉に頷く。

「面白そうだな」

「来るんじゃないかった」

「汁出すぎだつて」

「汁って言うな」

駅のホームを出たエルザ達はひとまず荷物を置くために宿を求めて街を歩くことにした。
そして街の住宅街に着いた時にとある一つの問題が浮上することとなる。

「で……………鉄の森の場所は知ってるのか？」

「それをこの街で調べるんだ」

「……………なあ」

「えー？ ちょっと嘘でしょ！？」

「「ナツとリヨウマがいないんだが（いないんだけど！？）」「」

「「……………ええ！？」「」

ガタンゴトン……

「ぐう………」

「はぁ……はぁ………」

列車に取り残された乗り物酔い状態で苦しむナツと熟睡しているリョウマはひたすら列車に揺られていた。

「お兄さん　ここ空いてる？」

すると黒い髪を後ろでくくった青年がその向かい側の席に腰を下ろした。

「あらら……辛そうだね　大丈夫？」

「ぐう………」

「ふう——はぁ——」

これだけを見ればかなり親切な優しい青年だろう。
だがしかし——

「妖精の尻尾くフェアリーテイル>………正規ギルドかぁ」

青年は苦しんでいるナツと眠っているリョウマを交互に見詰めて二タリと笑った。

「うらやましいなあ………」

この青年の名前はカゲヤマ。
闇ギルドの鉄の森に所属している魔導士だ。

列車の中の出来事（後書き）

「妖精くハエ>パンチ」

B
Y
リヨウマ&ナツ

<ララバイ>の正体（前書き）

「水の滅龍魔法は防御系が多いんです」

B
Y
リヨ
ウマ

<ララバイ>の正体

「正規ギルドは可愛い子が多いんだねえ……少しぐらい分けてよ」

異なる意味でダウンしているナツとリヨウマをニヤニヤしながら見ているカゲヤマ。

その笑みの中には憎悪と妬みが混在している。

「……………シカト？ それは闇ギルド差別だよ。妖精の尻尾って何て呼ばれてるか知ってる？ ハエだよ、ハエ」

するとカゲヤマは座席から立ち上がって少し助走をつける。
そしてダウンしている二人に向かって――

「ハエキ――ツク&ハエたたき――！」

座ってグロッキー状態のナツの顔面に飛び蹴りを決めて寝ているリヨウマの顔面にパンチを叩き込んだ。
もちろん意識が薄いナツと意識が無いリヨウマが避けられるはずもない。

「……………ああ？ 誰だてめえ……………」

「痛っ！？」

「やっと返事してくれたよ。まったく、これだから正規ギルドの魔導士はイラつくんだよね。自分たちが絶対の正義とか勘違いしちゃってさあ。バカじゃねえの？ ヒヤハハ！」

下卑た笑いを表に出しながらナツとリヨウマを上から見下す。

この青年は二人が反撃できないと思っているようだ。

「……………【海龍の鉄拳】！」

「うごお！？」

そして眠りから覚めたフェアリーテイル最強のチームの滅龍魔導士がカゲヤマを吹っ飛ばす。

「誰だテメエ？」

なんか目え覚める前に顔面殴られた。

全く意味が分かんねえし状況がつかめねえ。

とりあえず目の前のウゼエちゃんまげっぱい髪型の野郎をぶっ飛ばしておきました！

「て、テメエ！鉄の森くアイゼンヴァルトくに出してタダで済むと思ってるのか！？」

「ああ？ 眠ってる人の顔面を攻撃するぐらいしかできねえ弱虫野

郎が集ってるギルドなんか怖くもねえよ。それに鉄の森？ 闇ギルドじゃねえか。ん？ そういえばエルザが探してたギルドも鉄の森だったような……」

「な、なにをブツブツ言ってるんだ！」

そうだよ。エルザが潰すって言ってたギルドも鉄の森だったじゃないか。

いやー運がいいね。こんなところでターゲットに遭遇ってたか？ 日ごろの行いが良いからかねー

「いやー今日のお前は運が良いぜ。なんてったって俺の滅龍魔法を全部受けることができるんだからな」

「め、滅龍魔法！？」

「ん？ 闇ギルドだから知らねえか？ じゃあ教えてやるよ。俺はリヨウマⅡポセイジオ。妖精の尻尾の水の滅龍魔導士だ」

「ま、まさかお前が海龍<リヴァイアサン>！？」

なんか俺の二つ名がパワーアップしてますねハイ。
まあ、噂という物には尾ひれがつくものだからなあ。

「——ん？ なんだその妙に禍々しい笛？」

ウザ男の足元に何か髑髏のような形の木の笛が転がっている。
うーん……どつかで見たような……ってうおお！？

キキ————ッ！

「なっ！？ 急停車か！？」

「とまった……？」

「ん？ お目覚めかナツ。とりあえず一緒にこのウザ男殴んねえ？」

「了解（ニヤッ）」
「「セーの……」」

俺とナツは右手に魔力を込めてウザ男の顔面めがけて――

「【海龍の鉄拳】！」

「【火竜の鉄拳】！」

――パンチを叩き込んだ。

「げばお！？」

おおー……壁に激突した……弁償とかしないでいいよな……？

『先ほどの急停車は誤報だということが発覚しました。これより再発車します』

「やべえ！？ 逃げよう！」

「え？ ちょ、マジイ！？」

ナツが光速で荷物を纏めて俺の首根っこ掴んで列車から飛び降りた。
この速さで落ちますか貴方は！

「ってなんでお前ら列車から飛び降りてくるんだよ！？」

あ。 그레이가魔導四輪の上に載ってる。

ああー……これはぶつかるな。

ナツが

ゴーン！

「うぎゃあ——！？」

「よっと。うわぁ、いたそー」

流石にこの速さで頭を打つのは重傷だと思うので水のクッションで無事に地面に着地。

こういう時って水は便利です。

「無事だったかりヨウマ！」

「ん？ この魔導四輪を運転してたのってエルザだったん？」

運転席の方から降りてきたから間違いなくそうなのだろうけど。

「っ……」

「おっと。ったく、魔力の使い過ぎだバカ」

魔導四輪は運転手の魔力を消費して走行する乗り物だ。

もちろん走行速度と距離に消費魔力は比例する。

いくら強大な魔力を持っているエルザでも辛いものは辛いだろう。

「それにしてもあのちゃんまげ野郎後で覚えてろよ……皮膚を一枚一枚削ってやる。クケケ……」

「リヨウマって意外とSなのね……」

「あい」

人の顔面にパンチを叩き込みやがったからな。
この恨みは忘れん。

「ん？ リヨウマ、そのケガは何だ？」

「これか？ これはさっき列車の中でアイゼンヴァルトの魔導士に

寝てるときに顔面殴られたんだよ」

「アイゼンヴァルトだと！？ この、バカモノオ——！！」
「げばらあ！？」

何故か顔面にビンタ喰らった。
メチャクチャ理不尽だったの。

「な、なにすんだ！？」

「アイゼンヴァルトが今回の私たちの目的だと説明したはずだ！何故取り逃がした！」

「ナツが俺の首根っこ掴んで列車からダイブ決めたからだ！」

「（ぐるん！）」

「ご、ごめんなさい……」

エルザが怒る修羅のような形相で睨んだとたんにナツがしゅんとして謝罪した。

相変わらずこの上下関係は凄いな。

エルザに刃向かえるのってラクサス以外にいるのかねえ？

「そついえばあの魔導士変なもの持ってたぜ？」

「変なもの？」

「ああ。なんか髑髏みたいな木の笛持ってた。三つ目だったかなあ……」

すげえ禍々しかったから印象に残ってる。
しかも魔力が込められてた。

あれは相当ヤバイもんかもしれない。

「三つ目……髑髏……」

「どしたのルーシィ？」

「…あ！それがララバイだ！呪歌<ララバイ>死の魔法！」

「死の魔法？」

「あたしも本でしか見たことが無いんだけど、禁止されてる魔法の一つに呪殺ってあるでしょ？」

「ああ……その名の通り対象者を呪い【死】を与える黒魔法だ」

「呪歌<ララバイ>はもつと恐ろしいの」

怖ろしい？いや確かに呪殺は怖えけどそれがなんでララバイに関係してんだ？

ララバイが笛ってんならもつと別の使い方がありそうだが……

……ん？

待て。今何が引つ掛かった？

考える……

笛………呪殺………呪歌………広範囲………！

「お、おいルーシィ。ま、まさかララバイって……」

「気づいたのね。そう、ララバイは集団呪殺魔法。その笛の音を聞いたものに等しく【死】を与える最悪で最凶の魔法具なの」

そんなもの使って鉄の森てつのもりは一体何をしようとしてるんだ……？

まあ、とりあえずはあの魔導士を追った方が良くかもしれない。

「行こうぜ。この先の駅に鉄の森がいるはずだ。誰かが殺される前に止めねえと」

妖精の尻尾おれらは絶対的な悪を絶対に許さねえ。

<ララバイ>の正体（後書き）

「火の滅龍魔法は攻撃ほとんどだ！」

B
y
ナツ

鉄の森くアイゼンヴァルトく（前書き）

「え——っ!!!? あたし!!!?」

By ルーシィ

鉄の森くアイゼンヴァルト>

「集団呪殺魔法だと！？ そんなものを使われたら多くの死者が出る！急がねば！」

エルザがまた無理して魔導四輪をかつ飛ばしてます。

もちろん乗り物に弱いナツは再びグロッキー状態。

なんかハッピーはルーシイに魚とかいろいろ言ってるし。

グレイは魔導四輪の天井に張り付いてます。

え？ 何故かって？ 座席が空いてないからさ。

「おい、大丈夫かグレイー？」

「大丈夫なわけねえだろ！？ 氣い抜いたらいつでも落ちるぞこの体制！！」

「んー？ 風圧のせいでよく聞こえん。何て？」

「テメエの顔を氷漬けにしてやろうか……？」

「エルザ、もつと速度アップ」

「分かった！どこかにしがみついておいてくれ！」

「だってさグレイ。頑張れ」

「テメエマジで覚えとけよあばばばばばばば……！！！！！！」

上の方まで見えないからどうなってるかはよく分からないけど、多分風圧のせいで顔が大変なことになってるんだろ。多分良かった…… 実力で座席奪っておいて。

「見えた！オシバナ駅よ！」

「なんか煙出てるな」

「鉄の森くアイゼンヴァルト>！既に行動を開始していたとは……！！」

さてどうする？ いちいち魔導四輪から降りていたら間に合わないかもしれない。

どうすればあいつらが笛を吹く前にたどり着ける？

速く……速く……あ。

「良いこと思いついたあ（ニヤリ）」

「あ、あの……リヨウマ？ な、何を思いついたのかなー？」

「エルザ！今から魔導四輪にバリアを張る！このまま駅の中に突っ込め！！」

「分かった！」

「ウソォ！？」

「多分嘘じゃないです。なんてったってチーム【ドラグーン】の二人だからね」

さて、俺も魔法の方に集中するかな。

「何物も通さぬ水の結界よ！【流水盾＜シールド＞】！！」

魔導四輪の前に透き通った水の盾が構成された。

この魔法の強度はエルザの攻撃数回程度なら防ぐことができるくらい強固だ。

「え？ リヨウマって滅龍魔法以外も使えるの？」

「あい。リヨウマは滅龍魔法以外に水の魔法も使えます」

「まあ、こっちはサブみたいなもんだからあまり強くないけどな。いつもは滅龍魔法の方で防御してるし」

シーサラーはあまり攻撃の魔法とか教えてくれなかったからなあ。

『防御こそが最強の攻撃！』とか言ってたし。

それって要するにカウンターってことだろ。

ドコオオン!!!

そんなこんなでオシバナ駅の中へ強硬侵入。

慰謝料の方は評議院の方へお願いします。

っていうか鉄の森の連中が勢揃いしてますね。

何とか間に合ったみたいだ。

「やはり来たか、フェアリーテイル妖精の尻尾」

アイゼンヴァルト鉄の森の連中のちょうど真ん中にやけに変態的な格好をした白髪の魔導士がいた。

キモイ……っていうかあの格好と態度が似合いすぎだ。

なんかデカイ大鎌もってるし。

「貴様がエリゴールだな。ララバイ呪歌を使って何をするつもりだ」

「何を？ ヒヤハハッ！俺たちは暇だからよお。殺すのさ！等しく死を与える！」

ララバイをお手玉のように投げるエリゴール。

さつきから視線がスピーカーの方についてるような……
そういうことか。

「気を付けるエルザ。アイツはおそらくこの駅のスピーカーでアレを流す気だ」

「なっ!？」

「オイオイ何だよ先にネタ晴らしてか？ つまんねえなオイ。俺の大量虐殺の邪魔してえのかあ？」

「遊びだと!? 貴様……人の命を何だと思ってる!」

殺人を何よりも嫌うエルザが激昂している。
こんなエルザを見るのは久しぶりだ。

「まあまあ落ち着けて。お前ももうすぐ俺の遊びの犠牲者になるんだからよお」

「貴様あ……」

「アンタら最低よ！そんなんだから闇ギルドなんていうクズみたいなところまで落ちるのよ！」

「ああ？ ウゼエよお前。おい、カゲヤマ」

「残念だったな妖精ども！^{ハエ}俺たちが奏でる死の悲鳴^{メロデー}を聞くことなく死んじまうんだからなあ！！」

「なっ！？」

「しまった！」

「ルーシイ！」

カゲヤマの足元から影がのびてルーシイに襲い掛かった。
クソ！ここからじゃ間に合わねえ！！

「きゃあ！？」

「やっぱりお前かああああああああああああ！！！！」

ザシュツ

グッドタイミングで目覚めてくれたな。ナツ。

っていうか影って魔法で断ち切れたりするんだな。

俺も今度試すか……

「なっ………デメエ………」

自分の魔法を止められたカゲヤマがかなり悔しそうに顔を歪める。
そんなに自信があつたのか？
俺たち相手に。

「今度は地上戦だな！燃えてきたぞ！」

元気を取り戻したナツが鉄の森の連中を睨みつける。
しかし向こうも負けじと睨み返す。
これってなんだか不良同士のけんかみたいだな。

「……ふう。後は任せたぞ。俺は笛を吹きに行く」

「！？？」

「妖精どもに鉄の森の力を思い知らせてやれ」
ハエ おれたち

ガシヤアアン！！

なっ……逃げやがっただと！？
卑怯なヤツ！！

「外に出たか！」

「向こうのブロックだな……」

さてどうしよう。

ココには大量の鉄の森たち。
しかしエリゴールを追わないとたくさんの死者が出てしまう。
まあ、とりあえずはエルザが指示出すだろ。

「ナツとグレイはエリゴールを追え！」

「「む」」

いやそこで嫌そうな顔すんなよ。

「お前たち二人が力を合わせればエリゴールにだって負けるハズがない」

「「むむ……」」

「ここは私とリヨウマとルーシィで何とかする」

「え？ 私も数に入ってるの！？」

「オイラは戦力外つてこと……？」

「………まあ、俺たちは飛ぶしかできないから」

あ。そういえばファイもいたな。
あんまり喋らねえから忘れてた。

「エリゴールは呪歌をこの駅で使つつもりだ。それだけは何とか阻止せねばならない」

いやー見事なシカトつぶりですねお二人さん。
人の話はよく聞きましょう。

「聞いているのかっ！……！」

「「も……もちろん……！」」

「行け……！」

「「あいさ……！」」

お。ナツとグレイを追って向こうから二人の魔導士が追撃に向かったな。

さて、と……

「エルザ、本気で行ってもいいのか？」

「当たり前だ。こんな奴らに手加減なんて不要。ファイ、ルーシィ

とハッピーを安全なところに連れて行ってくれ。じゃないと……安全は保障できない」

「……………了解」

「たった二人で何ができるってんだ!!」

「こっちはこんなに数がいるんだぜ？」

「やっちまえ!!こんな妖精^{ハエ}ども敵じゃねえ!!」

あーあーぎゃーぎゃー言って正面からの攻撃か。

なんて単純な攻撃だ。

見るのも喰らうのもバカらしい。

「俺から行くぞエルザ」

「分かった。【換装『天輪の鎧』】」

「鎧の換装!？」

「……………エルザは武器だけではなく鎧も換装することが可能」

「しかもそれだけじゃないよ!」

天輪の鎧か……………ということは一気に葬り去る気だな？

「換装できる魔導士ぐらいこっちにもたくさんいらあ!」

魔法剣を携えた鉄の森の連中がこっちに突っ込んできた。

数は……………20か。

それなら…………

「俺を無視してんじゃねえよ。すう……………【海龍の咆哮】!……!……!」

ゴガシャアアアアア！！！！

俺が放った水のプレスで突っ込んできていた鉄の森が一掃される。
まだまだ向こうの数はある！！休まずに行くぞ！！

「どうだエルザ？ この前よりはパワーアップしたと思うんだけど」
「流石だなりヨウマ。私も負けてられん。舞え、剣たちよ」

エルザの命令で数えきれないぐらいの数の剣が宙に浮かぶ。
あ。やべえ。防御しねえと。

「エルザ……！？ まさかコイツ……」
「【循環の剣くサークルソード】」

まさに一掃。

円を描くように回転した剣が鉄の森くアイゼンヴァルトくを次々に
排除していく。

っていうかあの剣って結局何本あるんだろう？
今度聞いてみるか。

「やるお！俺様が相手じゃあー！！」

「ま……間違いねえっ！！コイツあ、フェアリーテイル妖精の尻尾最強の女……ティターニア妖精女王
王のエルザだ！！！！！！」

ティターニア
妖精女王

いつからかは忘れたがエルザが世間で言われるようになった二つ名
だ。

縦横無尽なその華麗な動きはまさに妖精のよう。
そんな感じだった気がする。

「す——ご——い——!!」

「「ふう……」」

「ひ、ひい!!」

あ。なんか生き残りが逃げた!

「エリゴールのところに向かうかもしれん。ルーシィ、追うんだ!」

「え————っ!!!? あたしが!?!」

「頼む!! (ギロツ)」

「はいいつ!!」

エルザの剣幕に負けたルーシィがハッピーと何故かフィアを掴んでさっきの魔導士を追って行った。

頑張れ新人。

「っ…… (よろっ)」

「よつと…… やっぱ魔力の使い過ぎだ。相変わらず無茶しやがって」

「リヨウマ…… 速く外にいる街の人たちに知らせないと……」

「そうだな。んじゃ…… ほいつと」

「なっ!?! / / /」

急ぐ必要があるのでエルザを抱き上げる。

この持ち方は俗にいうお姫様抱っこなるモノなんだがやっぱり持ちやすいなこれ。

初めてしてみただけど便利です。

「な、何故この持ち方をする!?! / / /」

「なんでってこの持ち方が一番速く移動できるからだ」

「ま、まだお前には早い！／／／」

「うつさい。いいから行くぞ」

「ちょ……うう……あ、ありがとう……／／／」

耳の先まで真つ赤に染めたエルザが尻すばみな声でそう言った。

まあ、今の彼女は魔力が尽きかけていていつ倒れるか分かったもんじゃない。

だから俺が支えるんだ。

チーム【ドラグーン】には一つの掟があるってことを知ってるか？別に何も難しくはない。

誰だってできる簡単な掟だ。

「さて、今度の休みに一緒に買い物にでも行つてやる。それで許してくれるか？」

「……………うん／／／」

俺とエルザのどちらかが動けなくなった時でも守れる掟。

俺たちはこの掟を守ることまで一緒にチームとしてやってきた。

その掟は――

「よし！出口だ！エルザ、言うことは決まってるのか？」

「当たり前だ。彼らをここから逃がす。ただそれだけのことだ」

「そう、だな！」

――大事なパートナーの支えになること

それがチーム【ドラグーン】の掟だ。

鉄の森<アイゼンヴァルト>（後書き）

「
.....
マックス・フー
スト
最大出力」

B
y
フ
イ
ア

妖精たちは風の中（前書き）

「お久しぶりです」

B
y
リョウマ

妖精たちは風の中

「命が惜しい者は今すぐこの場を離れよ！！！！駅は邪悪なる魔導士どもに占拠されている！！そしてその魔導士はここにいる人間すべてを殺すだけの魔法を放とうとしている！！！！できるだけ遠くへ避難するんだ！！！！」

駅員から奪った拡声器片手にエルザが集まっていた街の人々に避難を促す。

よし。避難を始めたな。

これで被害は少なくなる。

「ちょ、ちよつと！？　なんでそんな混乱を招くようなことを！？」
「お前らも逃げた方が良いぞ。エルザが言ってることはホントのことだから」

「ひ、ひい！！」

駅員も避難完了。

これでこの駅にいるのは妖精おれたちの尻尾と鉄あいつらの森だけだ。
あとはエリゴールを探すだけ……　って！？

「な、なんだよこれ……！？」

「風の結界……！？」

何故か駅の周りに竜巻のような風が渦巻いている。
なんだこれ……　誰の魔法だ？

「んあ？　なんで外に妖精ハエが二匹……？」
「「エリゴール！？」」

上空からの憎たらしい声。

目を上げてみるとそこにはラバイを持ったエリゴールがふわふわと浮いていた。

なんでコイツは駅の外にいるんだ？

目的は街の人々の抹殺じゃなかったのか！？

「中にいる。妖精ども」^{ハエ}

「なっ……」

「エルザッ！！！」

エリゴールに蹴り飛ばされたエルザの方を掴んで一緒に結界の中に入れた。

クソッ！こんな結界！

「痛い……」

「りよ、リヨウマ！？大丈夫か！？」

「大丈夫。ただのかすり傷だ」

なんだこれ？

入った時は何もなかったのに出ようとすると風が皮膚を切り裂きにかかるなんて……

「やめておけ。この魔風壁は外からの一方通行だ。中から出ようとすれば風が体を切り刻む」

「これは一体何のマネだ！！？」

「鳥籠ならぬ妖精籠^{ハエかご}つてところか。……にしてちとデケエがな。ははっ」

「エリゴール……」

「おお怖いねえ。相棒が傷ついた途端にこれかよ。チッ。てめえら

のせいで時間を食っちゃった。あばよ。俺はココでおさらばさせてもらうぜ」

「なっ!?!」

エリゴールが街の外へ飛んで行つた。

なんで街を出る必要がある……?

アイツの標的はここじゃねえのか……?

ドゴオオオオオン!!!

「!?!」

「エルザ!それにリヨウマも!」

「グレイか……」

壁を蹴破つて出てきたのはグレイだった。

エリゴールを追ってたんじゃないかったのか?

いや、そのエリゴールはもう逃げたけど。

「って何だその傷!?!」

「気にすんな。ただのかすり傷。それより何かそいつから聞き出したか?」

グレイの背後に転がっている魔導士を見て俺は言つ。

アイツは鉄の森の魔導士だ。

さっきグレイを追っていた二人の魔導士のうちの一人だからな。

「ああ!鉄の森の本当の標的はマスター達だ!この先の街で呪歌を

じーさんたち

フラバイ

吹く気だぜ!?!」

「くそつ。この魔風壁さえとければな……」

このままじゃエリゴールを追うどころか外にすら出れねえ。
マスターたちが危ないってのに……

「……待て。そういえば鉄の森にカゲヤマという魔導士がいるはずだ！奴は一人で呪歌^{ララバイ}の封印を解いた！！奴ならこの魔風壁だって解けるはず！！」

^{デイスベラー}
「解除魔導士か！？」

「カゲヤマ……？ ああ、あのちよんまげ野郎か」

「知っているのかリヨウマ！？」

「ああ。どうせ今頃ナツとでも戦ってるんじゃないかねえか……？」
「分かった！！探すぞ！！」

とりあえず俺たちはカゲヤマを探すことにした。
急がねえと時間が無い！！

「なっ……」
「か、カゲヤマ！？」

目の前でカゲヤマが背中を刺された。

あの後すぐにカゲヤマを見つけた俺たちは魔風壁の解除をしるとカゲヤマを脅した。

それにカゲヤマは応じたはずだったんだが……この惨状だ。

「テメエ……仲間じゃねえのかよ!？」

「ひ、ひい!!」

ドゴオオオン!!!

カゲヤマの背中を短剣で刺した鉄の森の魔導士を一撃で沈めるナツ。隣ではエルザがカゲヤマの意識を必死に戻そうとしている。ダメだエルザ。今のコイツには魔法は使えない。

「え、えっと……お邪魔だったかしら……?」

「あい」

「……………そういう問題か?」

ルーシイたちが後ろからやって来た。

良かった。無事だったみたいだな。

「そうだ!ルーシイ!お前の星霊で外に出れねえか!? ほらあの時みたいに!!」

「星霊? ルーシイって星霊魔導士なのか?」

「うん。っていうかそれは無理!!もともと人間が星霊界を通るこ
と自体が契約違反なのに!!しかも星霊は星霊魔導士がいるところ
でしか呼べないの!!外に出るためにはもう一人星霊魔導士が必要
になるのよ!!!」

確かに門はそうやってしか開けない。
クソッ。この場にアイツがいればこんな魔風壁なんかメじゃねえの
に……

「あああ！！そうだ星霊だ！！」

な、なんだ！？ハッピーが突然叫びだした！？持病か！？

「ど、どうしたのハッピー？」

「これ！」

「それは……バルゴの鍵！？」

ハッピー……なんでお前がその黄道十二門の鍵なんていうレアなモ
ンを持ってんだよ……

「勝手に持ってきたの！？」

「違うよ！バルゴがルーシーに届けてほしいって言ってオイラの家
に訪ねてきたんだ！！」

「バルゴが！？」

バルゴっていうことは乙女座の星霊か……やっぱり可愛い顔した星
霊なのかな？

「……リヨウマ？」

「何も考えてませによ？」

「だったら何故語尾を噛む？」

「……………痛あ！！！！」

「まったく……………」

エルザのゲンコツ痛い。

しかも鎧着けたままだし。

「バルゴなら穴を掘って外に出れると思うんだ！」

「それよ！！分かったわ！！ここはあたしの出番ってことね！！我……星霊界との道をつなぐ者。汝……その呼びかけに応え、門ゲイトをくぐれ。開け！！処女宮の扉！！バルゴ！！！」

「お呼びでしょうか？ご主人様」

メイドの星霊！？

そんなのアリか！？

「……リヨウマ？」

「だから何も考えてないって！！だから剣を振りかぶるな！！」

今日のエルザはいつもに増して怖い。

って……ん？ ルーシィがバルゴにいろいろ言ってる。

多分、外に出る方法とか言ってるんだろうけどなんで姫とかいう単語が聞こえてくるんだろう？

「では……行きます！！」

おお……凄いスピードで穴を掘ってる……ここをくぐれば外に出られるってことだな！！

「行こうぜ！！急がないとマスター達がヤバイかもしれない！！」

俺たちは穴を通って外に出てエリゴールを追った。

ナツはハッピーとフィアの【翼エーラ】で先にエリゴールを追って行った。それに続いて俺たちは魔導四輪に乗ってナツを追う。

俺たちが乗ってきた魔導四輪は鉄の森の連中に壊されてしまってい

たのでこれは盗んだ。

今は非常時だから許されるはず。スイマセン。

一応、操縦は俺がすることにした。

エルザが操縦しようとしたが魔力が残ってないだろと一喝してすぐごと引き下がってくれた。

あまり負担はかけたくない。

「足止め頼むぞ……ナツ……」

俺は魔導四輪の速度を一段階上げた。

「ナツ——！！」

魔導四輪を走らせているとダウンしたエリゴールと何故か上半身裸のナツを見つけた。

エリゴールを倒したみてえだな。

流石は滅龍魔導士。

「いたっ！」

「げえ！じーさんと一緒かよー！」

「マスターー！！」

やつとの思いで辿りついた定例会の会場の近くの森に^{ララバイ}笛を持った力ゲヤマとマスターが二人で立っていた。

しかも力ゲヤマの口には^{ララバイ}笛が咥えられている。
あれじゃあいつ吹くか分かったもんじゃねえ！！

「しっ」

俺たちがマスターのもとに向かおうとしたところに太ったオカマの羽根生えたおっさんが立ちふさがった。

こ、この人は……

「『^{ブルーベガサス}青い天馬』のマスター！？」

「ああ、エルザちゃんにリヨウマちゃん。大きくなったわねえ。
ところでリヨウマちゃん、ウチのギルドに入るって件について考えは変わったかしらあ？」

「入らないって言うてんでしょー！！」

鳥肌が立ちまくって俺の肌は限界を迎えようとしていた。

妖精たちは風の中（後書き）

「始めい！」

By マカロフ

ララバイ編完結（前書き）

「黒羽の鎧！！！」

B
Y
エルザ

ララバイ編完結

『どうした？ 早くせんか』

『……』

マスターに急かされてカゲヤマが笛に息を吹き込もうとしている。ただと見えない何かが彼の行動を縛りつけているようにカゲヤマは身動きが取れていなかった。

「いけないっ！！」

「黙ってなつて、面白エトコなんだからよ」

クワトロケルベロス

【四つ首の獵犬】のマスターがカゲヤマを止めにかかろうとするエルザを片手で制している。

どうしてマスターたちは口を揃えて大丈夫というんだろうか？

まあ、今は見守るしかないか……

『さあ』

『……！！』

カゲヤマが笛に息を吹き込もうとするが何故か吹くことができていない。

体中からは冷や汗が噴き出しており、目も血走っているが何故か笛を吹くことができない。

『何も変わらんよ』

『！？！？！？！』

『弱い人間はいつまでたつても弱いまま。しかし弱さの全てが悪^{あく}ではない。もともと人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だから

ギルドがある、仲間がいる。強く生きるために寄り添いあつて歩いていく。不器用な者は人より多くの壁にぶつかるとし、遠回りをすることもしれん。しかし、明日を信じて踏み出せばおのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らなくても な

皆がいるから強くなれる……

不安だからこそ仲間がいる……か。

マスターらしいな。

人の弱さを誰よりも知っているであろうマスターマカロフだからこそ言えることかもしれない。

やべっ、涙出そう。

『参りました』

眼から大量の涙を流したカゲヤマが笛ラッパイを地面に落として膝をつく。やっとギルドの本当の在り方というものに気づくことができたみたいだな。

「マスター!!」

「じっちゃん!!」

「じーさん!!」

「マスター!!」

感極まった俺たちはマスターのもとに駆けっていく。

「ぬおおっ!!? なぜこの4人がここに!!?」

「流石です!!!今の言葉、目頭が熱くなりました!!」

「痛っ!!!」

マスターが興奮したエルザに抱き寄せられている。

羨ましいな……………エルザが鎧を着けていなければ。
うわぁ……………痛そ……………

「じっちゃん、スゲエなア!!」

「そう思うならペシペシせんでくれい」

「一件落着だな」

「ホラ……………アンタ、医者行くわよ」

「よくわからないけどアンタもかわいいわ〜?」

マスターボブ……………そろそろ評議院に逮捕してもらうべきかもしれな
いな。

見た目上の罪で。

『カカカ……………どいつもこいつも根性のねエ魔導士どもだ』

「……………え?」

い、今、誰が喋った?

なんか笛から変な煙出てるし……………まさか……………

『もうガマンできん。ワシが自ら喰ってやろっ』

「笛がしゃべったわよっ!!ハッピー!!」

「あの煙……………形になってく!!」

笛から出てきた煙が人型の木の悪魔のような形になった。
な、ななななな……………

「……………怪物……………!!?」

笛から怪物ポン!?
意味分かんねえ!?

俺の言ってることも意味分かんねえ!?

「こいつア、ゼレフ書の悪魔だ!!!」

『腹が減ってたまらん。貴様らの魂を喰わせてもらっぞ』

笛が魂喰うのか……世も末だな。

「リヨウマ……」

「な、なんだ? 別に変なこと考えてないぞ?」

「いや……なんでもない……」

心の底からエルザに呆れられた。

やべえ……泣きそう。

さつきとは違う意味で。

「なに——っ!? 魂って喰えるのか——!?!」

「知るか?!?!?!」

ナツもナツで変なことを言ってる。

ドラゴンスレイヤー

滅龍魔導士ってみんな変わり者だということが今分かった。

反論は許さない。

「一体……どうなってるの? 何で笛から怪物が……」

ルーシーが体を震わせながら途切れ途切れの言葉で言う。

流石に新人にはショックがデカすぎる光景だったか……?

「あの怪物が呪歌ララバイそのものなのさ。つまり生きた魔法。それがゼレフの魔法だ」

「生きた魔法……」

「ゼレフ！？　ゼレフってあの昔の！？」

「【黒魔導士ゼレフ】魔法界の歴史上、最も凶悪だった魔導士……何百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を現すなんてね……」

ゼレフか……おそらくこの世界で一番有名な魔導士の名前だろう。今では禁じられている【黒魔法】の使い手。

いや、黒魔法の祖と言った方が良いかもしれない。

まあ、説明は難しいけどとにかくヤバイ魔導士のことだ。

『さて、どの魂から喰ってやろうか………　メンドクサイ。全員まとめて喰ってやろう！！』

そう意味不明に締めくくった怪物の口に不気味な魔力が集まってきている。

あれは……呪歌^{ララバイ}！

「……！！」「……」

「みんなっ！？」

これ以上好きにさせてはいけないと悟った俺、エルザ、ナツ、グレイの四人は怪物に向かって突っ込んでいく。

「うおおおおおおおおりやああああああ！！！！！！」
『がはっ！？』

ナツは怪物^{ララバイ}の体を勢いよく駆け上がって顔面を蹴り飛ばす。

「はああああああああああ！！！！！！」
『はああああああああああ！！！！！！』
【^{サークルソード}循環の剣】！！！！」

エルザは【循環の剣】^{サイクルソード}で怪物の体に無数の穴をあけていく。
痛そう……

『ぐおおおおお！……！！』

「だ、だめだ！間に合わん！！！」

「アイスメイク……………【盾】^{シールド}！！！！アイスメイク……………【槍騎

グレイは氷の造形魔法でララバイの体に巨大な穴をあけた。
相変わらずスゲー威力だな……

「今だ！！」

「了解！！【海龍の……………咆哮】！！」

『ぐおおおおああああああああ！！！！？？？』

俺の滅龍魔法でララバイの両腕を吹き飛ばす。
そろそろ終わるな……………よし。

「換装！【黒羽の鎧】！！」

「アイスメイク……………」

「右手の炎と左手の炎を合わせて……………」

「海龍の魔力を圧縮圧縮……………」

そして…………

「【黒羽の太刀】！！！！」

「【槍騎兵】^{ランス}！！！！」

「【火竜の煌炎】！！！！」

「【海龍剣】！！！！」

ズバア！！

グサアア！！

ゴオオオオオオ！！！！

ズシャアアアアアアア！！！！

トドメのフィニッシュがララバイの体に突き刺さり、ララバイは建物ごと地面に崩れ落ちた。

「本当にやるのか？」

【呪歌事件】^{ララバイ}から二日後の今日、俺は約束通りナツと決闘することになった。

結局定例会の会場をぶっ潰した罪は重く、俺たちは深く反省した。反省しただけです。

だってそれ以外にすることねえし。

「当たり前だ！！今日は勝つ！！」

「あ、そう」

今日は俺とで明日はエルザと決闘の予定を組んでいるナツ。
妥当な判断だと思う。

だって俺とエルザの二連続バトルは流石に魔力とか体力とかが尽きてしまっただろうからな。

っていうか俺、こんなに余裕層にしているけど正直言っただけ勝てるか分かりません。

俺の滅龍魔法って攻撃力がナツに劣るからなあ……

「あたしこういうのダメ！どっちも勝ってほしいもん！」

「案外純情なのな……」

「リヨウマ——！！負けたら二日後の買い物は全部お前のオゴリだからな！！」

今凄く聞き逃しができない言葉が聞こえた気がする。

「エルザさん！？俺の財布の中身の事情とか誰よりも知ってるはずですよねぇ！？」

「知ってますけど何か？」

「悪魔かお前は！！！！お前の買い物についていつもいつも鎧ばっかだから金の消費率が半端ねぇんだって！！！！」

「鎧の何が悪い」

「値段が悪い！！！！お前愛用の【天輪の鎧】買った時なんか二日間の仕事の報酬が一気に吹っ飛んだんだからな！？」

「そうだったか？」

「そうだったの！！！！」

「そんなにオゴリが嫌なら勝てばいいだろう！！」

「逆ギレですか！？　アンタただ都合のいい思考回路してんだよ！！！！」

「ダメ……か……？（うるつ）」
「ぐっ……ひ、卑怯な……」

結局OKしましたけど何か？
エルザの涙目に勝てる奴連れてこい。
俺が一生師匠って呼んでやるから。

「相変わらず尻に敷かれとるのう」
「だったら止めてくださいよ。こっちだって結構苦労してるんですから」

「はっはっは。若さゆえの過ちというじゃろって」
「意味分かんないです」

「エルザ！リヨウマがこの勝負に勝ったら今夜はお楽しみじゃと言っ
つておるぞー！」

「はう……リ、リヨウマが……その……シたいなら？ その……
私は……OKだ……／＼」

「黙ってるジジイ！！　そしてエルザは落ち着けて！！！！こんなス
モール魔導士に惑わされるな！！！」

いつもいつも調子に乗って俺たちの関係をからかうんだから……
一回シメルか。

「さて、と……そろそろ始めるか？」

「おう！！燃えてきたぞー！！」

「というわけなので審判頼みます。マスター」

二人に平等な判定ができるのはこの人しかないということとで急ぎ
よマスターマカロフが審判をすることになった。

まあ、この人自身が面白そうだからと立候補したのもあるんだけど

……

「それでは……始めい……!!」

「いくぞおお!!!!【火竜の咆哮】!!!!」

フェアリーテイル
妖精の尻尾の二頭のドラゴンが激突した。

ララバイ編完結（後書き）

「そこまで!!!」

B
y
???

リヨウマVSナツ（前書き）

「燃えてきたぞ!!!」

By ナツ

リョウマVSナツ

「【火竜の咆哮】！！！」

ナツの口元から龍の炎の魔力でできた火炎放射が飛んでくる。
へえ、また威力上がったんじゃないの？

でも………こんなもんじゃ俺には効かねえ！！

「【海龍の咆哮】！！！」

「チツ！！」

俺の【海龍の咆哮】は海龍の水の魔力でできた水流を相手に飛ばす技。

しかもその水流の中に切れ味が鋭い水を含ませているからダメージも大きい技だ。

もちろん炎如き消せねえわけがねえ！！

「【火竜の鉤爪】！！！」

「【海龍の鉤爪】！！！」

俺たち二人の攻撃は今のところほぼ互角。

基本的に俺よりナツの方が攻撃力に長けている。

でも、俺は応用力と防御力でさらにその上に行く！！

「切断系の技発動ってか！！！」
【海龍剣】かいりゅうけん！！！！」

【海龍剣】。極限まで圧縮したことにより強度と切れ味が上がった水を片手剣サイズの剣に創造する技。

一応エルザに剣技を習ってんだ！！！！

すぐにやられんじゃねえぞ！！！！

「そら！そらそらそらそらああああ！！！！！！」

「ぐっ…くっ…ぬりやああああああ！！！！！！」

俺の剣を一つ一つ正確にさばいていくナツ。

しかし俺の剣の切れ味に無数の傷がナツの体に付いていつている。
やっぱり手だけで捌こうとしてるのが甘いんよね。

「んああああああ！！！！！！うっとうしい！！！！【火竜の鉄拳】！！！！」

「うおお！？突然だなオイ！！！！」

轟という音が俺の耳の真横で鳴った。

今のは結構ヤバかったな。

喰らってたら即アウトだったの。

「ぶっ飛ばえ————！！！！【火竜の咆哮】！！！！」

ゴオオオオオオオ！！！！

先ほどよりも威力が高い【火竜の咆哮】が俺に襲い掛かる。

あ。これは捌き切れんわ。

しゃーねーか……新技使用しまーすつと。

「滅龍奥義！！！！かいりゅうらんぶ【海龍乱舞】！！！！」

パンッ！ゴアア！パシッ！

海龍の魔力を拳に込めて相手に叩き込むこの技は威力よりも手数優

先のようなもの。

だけど、ナツの炎を吹き飛ばすぐらいの威力はある……！！

「ふう……で、もう終わりか？」

ナツの【火竜の咆哮】を綺麗に消し飛ばした俺はその場で肩を回しながらそう言った。

俺だってエルザに扱かれながらも修行してたんだ。

まだナツに負けるわけにはいかねえ。

「まだまだああ……！！滅龍奥義……！！【紅蓮火竜拳^{くれんかりゅうけん}】……！！」

「【海龍乱舞】……！！」

似たような技をほぼ同時に繰り出した俺たちの技が拮抗し合う。

ナツのパンチが俺の腹に当たり、俺のパンチがナツの顔面に当たる。そんな技の繰り返しを何回も何回も繰り返していく。

おつ。ナツが今ふらつとした。

そろそろフィニッシュとしますか……！！

「これで終わりだナツ……！！滅龍奥義……！！【海龍蒼刃破^{かいりゅうそうじんぱ}】……！！」

海龍剣を両手に持って相手を斬り刻んでいくこの技。

さすがに斬れ味は抑えているが当たると死ぬほど痛いので要注意です。

「ぐっ……ぐああああああああ……！！……！！」

ドゴオオオオオオオン……！！

俺の技で吹き飛ばされたナツが地面にぶっ倒れた。

そして俺は寝転がっているナツの首元に一本の海龍剣を突き立てる。

「そこまでいつ!!!」

「わあああああああああ！！！！！！！！！！」

俺が勝つ方に賭けていた奴らの歓声が上がる。

っていうか賭けしてんじゃねーよ。

俺たちは必死に戦ってたのに。

「くっそお——！！！！また負けた！！！！何でああ！？」

首元から海龍劍をどけた後ナツがその場に座り込んで頭を？き筆記始めた。

ナツは勝てるつもりだったんだろぅな。

だって技の攻撃力的にはナツの方が強いんだから。

「ナツ。お前は一直線すぎるんだよ。だからすぐに技を読まれる」

「はあ？ いいじゃんか一直線すぎてモ」

そう。ナツの一直線なところは悪いところを全部吹き飛ばすぐらいの良いところになる。

ナツは火竜の如き魔導士。

その力を扱ってんだから今のナツが一番ちょうどいいのかもしれない。

「そうか。でも今回は俺の勝ちだ。残念だったな。」

「ぬりやあああああ！！！！次はぜってー勝ーつつ！！！！」

「させるかボケ。次も俺の勝ちだっての」

「その減らず口を次はたたき折ってやる!!! よおおし!!! 燃え

てきたぞ！！！」

ナツがいつものようにポジティブシンキングで俺に勝つための修行法を考え始めたので俺はエルザのもとに行く。

「どうだエルザ。俺の勝ち」

「流石だな。私の相棒なだけはある」

「まあ、仕事中にアンタに散々鍛えられてますからねー。こんなことで負けてたら俺の苦労は何だったんだ？ってことになるし」

「しかし……買い物の代金は結局オゴリにはならなかったか……」

エルザが悔しそうに俺をキッと睨みつけてくる。
はあ……しゃーねーか。

「いいよオゴリで」

「ふえ？」

止めるその可愛い顔。

「だから今度の買い物は俺のオゴリでいいって言ってんだ。どうせ今のところ何も買うものとかねえしな」

「リヨウマ……（パアアアア）」

やべっ。

エルザの満面の笑みがマジ可愛い。

エルザの方が年上のはずなのに……何この可愛い生き物。

『そこまでっ！！！』

パアアアアン！！！！

「『『『『『え？』『』『』『』』」」

なんだ今の声。

後ろの方から聞こえたけど……！？

俺が後ろを振り返るとカエル顔の変な奴がそこにはいた。
えっと……どこかで見覚えが……

「全員その場を動くな。私は評議院の使者である」

「評議院！？」

「なんでこんなところに評議院が！？」

「あのビジュアルについてはスルーなのね……」

もうみんな気にしなくなってるのかもな。

アイゼンヴァルト

「先日の【鉄の森テロ事件】において器物損壊罪他11件の罪の容
疑で……エルザ＝スカーレットを逮捕する」

「え？」

「なんだとお！？」

エルザが逮捕！？

なんでだよ……！！

あれはみんなを助けるためにやったことだからしょうがねえだろう
が……！！

「おとなしくついてきてもらおうか」

「……………（コクッ）」

評議院の使者に黙ってついていくエルザ。

おいおい嘘だろ冗談だろ？

「エルザ！……！」

「オイ！落ち着けてリヨウマ！……！」

「離せジエツト！……あのままじゃエルザが連れてかれちゃう……！」

「そ、そうだけだよ……！」

「アイツは別に何も悪くねえのに……！なんでアイツが全部罪を被らなきゃなんねえんだよ……！」

大切な人が遠くへ行ってしまう。

そんなのはシーサラーの時だけでこりごりだ……！

「みんな……！リヨウマを抑え込むの手伝ってくれ……！」

「こつちも頼む……！ナツが暴れそうだ……！」

「ぐっ……！」

フェアリーテイル

【妖精の尻尾】のみんなが俺とナツの上に乗って動きを止める。

クソ……動けねえ……

目の前ではエルザが評議院のものと思われる魔導四輪に乘せられている光景がある。

あれに乗ったが最期、俺のもとから離れてしまっつてのかよ……畜生……！

「エルザア——……！」

俺とナツがエルザの名前を呼ぶが

エルザはそのまま評議院に連れて行かれてしまった。

クッソ……絶対に取り返してやる……

リヨウマVSナツ（後書き）

「エルザを…………返せ」

B
Y
リヨウマ

大切なもの（前書き）

「いい度胸してるじゃないか……」

B
y エルザ

大切なもの

『こっから出させて！！エルザを追わせろお——！！』
「クソッ！！なんで炎でもこの縄切れねえんだ！？」

エルザが評議院の使者に連れて行かれた後、エルザの後を追おうとしたリヨウマとナツをあたしたちが捕まえて動けない状態にして今に至る。

何故カリヨウマは青いトカゲになってるんだけどマスターがその形に変化させたのかな？

「ダメよ。そこから出したらリヨウマ、評議院を潰しかねないですよ？」

『潰しはしねえって！！ただ俺はエルザを取り返しに行くだけだ！！！！』

「ぬあああああああ！！！！焼き切れねええええええ！！！！」

「それにしても逮捕だなんて……」

「相手は評議院だ。ウチが何と言おうとあいつらが黒といえば黒になるんだよ」

「でも……これは不当逮捕じゃないの？」

『不当とかいう問題じゃねえ！！！！俺はエルザを助けに行く！！！！だからこっから出せえ——！！！！』

評議院は全国の魔導士からあまり好かれていないらしいの。

秩序秩序秩序。すべてをルールで縛ろうとする評議院の姿勢が受け入れられない。

だつてこんな不当逮捕なんてするぐらいなもの……

「もう！やっぱリエルザを取り返しませう！！」

「落ち着かんかルーシィ……」

「何言つてんの！？ これは不当逮捕よ！！！」

「そんなこと言つてもな……今の俺たちにできることなんて何もねえんだよ」

『話し込んでないで俺をここから出してくれえ——！！』

「本当に出して良いのか？」

「「「「「「「え？」「」「」「」」」」」」

リヨウマが何度目か分からない叫びをした時、
マスターがそんなことを言い出した。

『……………』

「どうした？ いきなりおとなしくなつたではないか」

「ぐっ……………ヤベッ」

何故かナツの頬に脂汗が浮かんでる。

え？ なんて？

ナツ……………何かやったの？

「カツ！——！」

『ぐあああああ——！！』

「ヤベエ……………」

「「「「「「「なっ！？」「」「」「」」」」」」

マスターがトカゲの姿になっているリヨウマに向かって魔法を放つたの。

そしたら……そのトカゲがマカオの姿になったのよ!!!

「なんでマカオが……」

「ナツには借りがあつてよ、それでリヨウマの身代わりになってほしいって頼まれたから仕方なく……」

「ナツ……」

「だ、だってリヨウマがどうしても行きたいって言うからよお!!
!っていうかアイツを止められる奴がここのギルドにいんのか?
リヨウマはエルザのことになると誰にも止められないぐらい暴れま
わるんだぞ?」

「……うっ」「……」

ナツの言葉にミラさんとグレイとフィアとカナとエルフマンがかなり恐怖した表情になった。

一体何をしたの!? このメンバーが揃いも揃って恐怖する事って何!?

「で、でも流石に評議院に手は出さないだろ……」

「エルザの悪口言われたからって闇ギルド一つ一人で殲滅したことがあるけど……」

「あの時のリヨウマは……漢^{おこい}だった……」
「うっ」

す、すごいことやったのね……たった一人でギルド潰すって……怒りって怖い。

「全員黙っておれ。静かに結果を待てばよい」

マスターが凄く怖い。

『被告人エルザ＝スカーレットよ。先日の鉄の森によるテロ事件において主はオシバナ駅一部損壊。リュシカ溪谷鉄橋破壊。クローバーの洋館全壊。……これら破壊行為の容疑にかけられている。目撃証言によると――』

ドゴオオオオオオン！！！！

『何事！？』

ふう……脆い壁だったなあ。

ちゃんとリフォームしとけての。

じゃねーと……すぐに破っちまいそうになるからな。

「よう評議院。早速だが……エルザを返してもらおうか？」

「……」

「はあ……バカリヨウマが……」

「え？」

なんでみんな静まり返ってんの？
そしてエルザは何故溜め息吐くし。
全く意味が分かんねえ。

「はあ……二人を牢へ」

「……すいません」

「え？ え？」

俺は全く状況がつかめないままエルザと共に牢屋に連れて行かれた。

「まったく……なんてことをしてくれたんだ」

「本当に申し訳ございません」

あの後エルザからこれは形だけの逮捕であり罪にはならないということの説明された。

その時の自分の顔は真っ青に青ざめていたことだろう。

そして今はエルザに向かって全力の土下座をしている。

本当に恥ずい……

「貴様がこんなことをしなければ今日中には帰れたはずだったんだ」
「ゴメンナサイ」

「なのに貴様のせいでこんな固い床の上で今日は寝なくてはならない」

「本当に反省してます」

エルザが額に青筋を浮かべながら説教してきますハイ。

しかも10割俺が悪いんでまったく言い訳ができないってのが辛い。あう……そろそろ足がしびれてきた……

「だが、まあ………その…嬉しかったぞ／＼／」
「っ！？／＼／ お、おう………／＼／／」

そして俺たちは翌日に釈放されて妖精の尻尾フェアリーテイルに帰ることができた。

「すまん遅れたー!!」

釈放されてから一日たった今日、俺は約束通りエルザと買い物をすることにした。

まあ、そんなわけなんだけどまさかの遅刻スタート。

エルザの後ろに修羅が見えるような気がする……

「いい度胸してるではないか……ああ？」

「マジですいませんゴメンナサイ許してください……でもこれには深い事情が……」

「なんだ？聞いてやってもいい」

「さんきゅーエルザ！！実はフィアに起こしてくれるように頼んで、時刻通りにフィアに起こしてもらったわけだ。けどそこからやけに眠気が襲ってき——あ」

今思ってみればこの言い訳って自分の首を斬り落とすぐらい致命的な言い訳じゃね？

うわぁ……見ろよエルザの今の顔。

なんか虫けらを相手にしてる時の表情だぜあれは。

「……………辞世の句を読むがいい」

「ストップエルザさん！！俺はまだ死にたくない！！！」

「黙れ！！結局はお前が二度寝してしまっただけだろう！！！」

「その点についてはかなーり反省してる！！だから許して！！！！な？」

「……………はぁ、しょうがない。今回だけだぞ」

そう言っただけで剣を戻すエルザ。

良かった……死ななくて済んで。

「で。どっから行くんだ？」

「そうだな。じゃあ——」

そして俺とエルザは久しぶりに休日を堪能したんだ。
俺の財布はすっからかんになっちゃったけど……はぁ。

「ふう……今日は楽しかったな……」

フェアリーテイル

妖精の尻尾の女子寮の食堂で夕飯を食べながらエルザがそう呟く。
彼女は、その強さのせいで恐ろしく思われているが、まだまだ年頃の女の子なのだ。

「へえ、楽しかったんだ。リョウマとのデート」

「羨ましいね。異性と足の疲労させに行くなんて」

「いや、そこはデートって言おうよ、ラキ……」

「わ、私だって次こそはアルザックと……」

「っ！？／＼／」

そしてエルザの呟きを聞き逃さなかったレヴィ率いる女子寮メンバーがニヤニヤしながらエルザの方を見る。

これが妖精の尻尾の女子寮の暗黙のルール。

誰か一人でも楽しいことがあったならば、根掘り葉掘り聞きだすこと。

「で、何をしたの？ デートっていうからやっぱり手とか繋いだ？」

「……………ああ／＼／」

「口の中掘りあつたりした？」

「なっ……／＼／」

「だからラキはどうしてそうややこしい言い方をするかなあ！？」

「だってつまらないでしょ。普通に聞くなんてー。やっぱり変な言い回しが一番だと思わない？」

「もう、いいや……」

ラキの変な物言いに心の底から疲れたような表情をするレビィ。
その隣では涙を流しながら料理を平らげていくビスカの姿が。
頑張れ。信じていれば明日は煌めく。

「ごちそうさまー!!」

「あ！逃げたー!!」

ドグシャア!!

食事を終えたエルザはレビィとラキを血祭りにあげて自室へと戻っていった。

「ふふっ」

自室に戻ったエルザは窓を開け放ってその縁に座っていた。
手には今日リヨウマに買ってもらった緋色の宝石が付いた首飾り。
今までにもリヨウマに物を買ってもらったことはあるがこんなに豪華なものは初めてのようだ。
だからこそこんなに嬉しそうな表情をするのだろう。

「キス か……」

自身の唇を人差し指で抑えてエルザは呟く。
別にリヨウマとキスをしたことが無いわけではない。
ただ……キスというものはそんなに軽々しくして良いことではない
とエルザは思っている。

いつまでも一緒にいられるわけではないかもしれない。
こんな仕事をしている以上命の危険はあるし時には死ぬかもしれない。
い。

だからこそエルザは……

「いつまでも傍にいられるように私も頑張らなくてはな……」

どんな時もリヨウマに守ってもらってばかりでは駄目。

そうエルザが思い始めたのはリヨウマとチームを組んで一年たったころのことだ。

それから何年もたってエルザはリヨウマよりも先にS級魔導士になった。

その時のS級魔導士昇格試験にはリヨウマも出場していた。

しかしリヨウマは悔しそうにはしながらも心の底からエルザを祝福したのだ。

相棒でありライバルでもあるリヨウマとエルザ。

彼と彼女は共に支え合うことを望んでいる。

「さて！明日は久しぶりにリヨウマと仕事にでも行くか！！！」

……まあ、別にリヨウマと仕事に行くのは久しぶりというワケでもないが……

「くしゅん！！　なんだ……凄く寒気がする……」

「……………エルザがまた仕事に行くことを考えてるんじゃないか？」

「それはそれで洒落にならん」

大切なもの（後書き）

「エルザはナツたちを追って行ったのか……ご愁傷様だナツ」

By リヨウマ

平和な一日？（前書き）

「黙ってるクソガキ!!」

B
y
ラクサス

平和な一日？

今日は久しぶりに仕事も何もない全くの休日。

フィアはまだ家で寝てる。

フェアリーテイル

俺は暇だったので妖精の尻尾のギルドに来ただけど……

「あれ？ エルザは？」

今日は珍しくエルザに会わない。

どっか行ったのかな？

まさか一人で仕事とか？

「ナツたちを追いかけて行ったわ」

「ナツ？ なんで？」

「……………勝手にS級クエストに行っちゃったのよ」

ミラが顔に影を落としてそう言った。

眼には力がこもっていなくて表情も悪い。

「マジか…………」

「グレイが捕まえに行ってくれてたはずなんだけどまだ帰ってこなくてしょうがなくエルザが…………」

「死ぬんじゃないかナツたち。違う意味で」

誰よりも規律に厳しいエルザが追いかけて行ったんだ。

流石に無事じゃあ済まないだろう。

ご愁傷様。

「ん？ ナツたちって……ナツとハッピーだけ？」

「……………ルーシー」

「はぁ……またあのトリオか……で、何のクエストに行ったんだ？」

「……ガルナ島の呪いを解くクエストよ」

「げえ！！呪いの島かよ！！」

ガルナ島。

昔から悪魔の島と呼ばれている島の名前だ。

勿論誰も近づかないし誰も行かない。

無事に帰ってこれないらしいからな！。

「ま、エルザがいるなら大丈夫だろ。んでちょっと聞きたかったんだけどタツヤはまだ帰ってきてねえの？」

タツヤ。

フルネームで呼ぶとタツヤ＝カオスロッド。

フェアリーテイル
妖精の尻尾の6人のS級魔導士の一人だ。

しかしその実力は他のS級魔導士が相手にならないほど別格。

使用する魔法の名前は【光闇魔法（ライト＆ダークネス）】。

究極魔法の一つだ。

使用者ですら制御が難しいと言われるこの魔法をタツヤは完璧に制御している。

昔はミラと一緒に仕事に行っていたんだけどミラが引退してからは一人で仕事に行くようになった。

っていうか一人で仕事に行かないと自分の魔法に巻き込まれてしまいうらしい。

どれだけ強力な魔法だよ光闇魔法……

「ふふふ……………連絡の一つもしてくれないのよ？ こっちがどれだ

け心配してるか知りもしないで……」

「グラスが割れるグラスが」

「手紙を送るけど返事無し。ねえどう思う!？」

「知らねえよ!!!そんな意味不明な八つ当たりを俺にするな!!
!」

とりあえずミラから離れよう。

変なスイッチが入ったみたいだから……怖かった。

えつとどっかに暇そうな奴はーつと………あ、いたいた。

「よおラクサス。元気してる?」

「ああ? なんだリヨウマか……」

このツンデレ系二十代はマスターマカロフの孫であるラクサス!!ド
レアー。

S級魔導士のうちの一人だ。

基本的に強いやつ以外は興味が無いという性格をしてみんなに
は嫌われている。

まあ、俺は仲良い方だけど。

「相変わらず一人でいますねアンタ。雷神衆はどうしたよ雷神衆は」

「俺はあいつらの保護者じゃねえんだ。知るわけねえだろ」

「はあ、育児放棄か。泣くぜあいつ等」

ガタンッ!!!

「お前マジで殺すぞ。ああ?」

「やってみろよ雷野郎。前みたいにボコボコにしてやるつか?」

バチバチバチバチイ!!!

睨み合う俺とラクサスの間に火花が散る。

気のせいかな他のみんなが距離を空けている気がする。

まあ、しょうがねーと思うけど。

「止めんか!!」

「あ、マスター」

「チッ」

カウンターに腰かけていたマスターの怒号が飛ぶ。

俺とラクサスの喧嘩を止められるのは今のところタツヤとマスターの二人だけ。

他のみんなは巻き添え喰らって倒れるから止めることができないってワケ。

「なんでお主らはそう顔を合わせては喧嘩ばかりしとるんじゃ……」

「すいませんマスター。貴方の孫の顔がどうしても気に食わなくて」

「表出るクソガキ!! 体の電気信号狂わせて一生動けねえ体にしてやる!!」

「ああ!? テメエこそその首斬り落として人生終わらせてあげましようかあ!？」

「止めんかああああああ!!!!!!」

「ぐぶえ!!」

堪忍袋の緒が切れたマスターが巨大化させた拳で俺とラクサスを叩き潰した。

あ……相変わらずの破壊力だ……

「な、何しやがるジジイ!!」

「ラクサス!!! お主はもつと協調的にはなれんのか!？」

「無理だ」

「断言してんじゃねーよツンデレ魔導士!!」

「誰がツンデレだコラ!! テメエは頭の中身も水で埋まってんじゃねえのか!？」

「【海龍の鉄拳】!!!」

「うおお!! あぶねえ!! いきなり魔法使ってんじゃねーよクソガキ!!!」

「俺は子供だから自分を抑えられないんですウ!!! 【海龍の鉤爪】!!!」

「調子に乗ってんじゃねえぞ!!!」

ドカツ!! バキツ!! グシャツ!!!

もはや妖精の尻尾名物とでも言えそうな俺とラクサスの殴り合い。

フェアリーテイル

それに巻き添えを喰らって壊れていくギルド。

そして……… 本気でキれるマスターマカロフ。

「やかましいわああああああああああ!!!」

「ぐぺっ!？」

しーん………

マスターに再び叩き潰された俺の意識はそこで途切れることとなった。

「イテテ……派手な攻撃しやがって……」

俺とラクサスの喧嘩があつた晩、俺は自分の家で水魔法の特訓をしていた。

【化け猫の宿】とかいう魔導士ギルドにいる天の滅龍魔導士は治癒魔法とか言う珍しい魔法が使えるらしい。

流石に俺も防御メインの水の滅龍魔法ばかりでは戦いで不都合が出るかもしれない。

だから少しでも水魔法の攻撃魔法を増やしていかねーと……

「……おい、リヨウマ。この魔法とかいいんじゃないか？」

「んー？ 【狙撃水銃】？ ってこれ遠距離技じゃん。俺に敵と戦うとき毎度毎度遠くに行けって言ってるのか？ しかもこの技は既に習得済みだ」

「……じゃあ、これは？」

「【雨】？ いやこれ絶対役に立たねえだろ」

「……お前なら『エルザが薄着の時にしたら下着が見えるかもな！』とか言つてOKするかと思つた」

「お前どんだけ俺をおかしい変態だと思つてんだよ！！別にそんな魔法とかいらねえし！！」

「……じゃあこの『習得済み』のしるしは何？」

「……さ、さあ？ 何でしょーねー？」

「……一片エルザに殺される」

「やかましい！！！！良いじゃねえか魔法のレパートリーが増えるわけだし！！暑いときとか便利そうだし！！！！」

「……………そう、だな」

「なんでそう何かが齒に挟まったような物言いをするかなあ!？」

「……………いや、別に何も思っていないな——」

ドゴオオオオオオオオオオッ!!!!!!

「「!？」」

突然俺たちの耳に激しい音が聞こえてきた。

あの方角は……妖精の尻尾フェアリーテイルのギルド!？

「ファイア——!」

「……………了解。【翼^{エーラ}】」

翼を生やしたファイアが俺の首元を掴んでギルドに向かって飛翔を始めた。

一体何があつたんだ……？

俺はギルドへと急いだ。

「う、ウソだろ……」

ギルドへと向かった俺を待っていたのは予想だにしない光景だった。なにか巨大な何本もの鉄の棒状のものが突き刺さってボロボロの状態になっている俺たちのギルド。もうすでに補強できるレベルじゃない。

「俺たちのギルドが……」

俺はおぼつかない足取りで地面に転がっていたギルドの看板を拾い上げる。

半分に折られてしまった看板。

俺は7年前にこの看板に未来の希望とシーサラを絶対に見つけることを誓ったんだ。

このギルドだつて俺が入ってから一度も姿を変えたことは無かった。だけど……今のギルドはもはや廃墟のような外見になってしまっている。

だれがこんなひどいことを……

「……………リヨウマ、あそこに描かれている紋章って……」

「紋章……？」

傍に立っていたフィアがギルドを指差してそう言った。

その指の先を見つめるとそこにはかなり見覚えのある紋章が描かれていた。

あの紋章は……

「ファントムロード【幽鬼の支配者】……………」

「……………ウチとは仲が悪いからな……………」

幽鬼の支配者ってことはギルドを壊したのは鉄の滅龍魔導士のガジルⅡレッドフォックスか？

ははっ、相変わらず舐めたマネしてくれてんじゃねーか…………

ざー…………

壊れたギルドを清めるかのごとく大雨が降っている。

「すう……………」

俺は静かに雨を体に取り込んでいく。

憎しみ。

憎悪。

憤慨。

怒り。

その単語が俺の頭を蝕みそうだったから頭を冷やしたかったんだ。

「……………ごちそうさま……………おかげで少しは落ち着いた」

俺の体から海龍の魔力が漏れている。

容量以上の水を吸収してしまったので体に入りきらなかったのだろ
う。

だからどうした。

確かに憎しみは何もいい結果を生まない。

けど……………

「絶対に叩き潰してやる……………【幽鬼の支配者】がア……………」

ベキイ！！！！

俺の体から漏れた魔力がギルドに刺さっていた鉄塊を一本へし折った。

今はまだ行動を起こしてはいけない……

マスターがOKというまでは怒ってはならない……

これは準備だ。

あの幽鬼^{クス}の支配者どもをぶちのめす為のな……

「……………リヨウマ……………」

心配そうな顔をしたフィアが俺の顔を覗き込む。

大丈夫だ。そう俺は返してフィアと共に家へと帰った。

心の中に怒りという名の悪魔を飼って……

平和な一日？（後書き）

「^{ガキ}子供に手え出されて黙ってる親はいねえんだよ……」

B Y マカロフ

妖精の怒り（前書き）

「ファントム……」

ブルーシー

妖精の怒り

結果論

昨晚、悪魔を飼っているだの怒りに震えているだの言っていた俺だがS級クエストから帰ってきたエルザに『そんなことでは【幽鬼の支配者】と何も変わらんだろうが!!!』と説教されてしまつて悪魔死にました。

弱え……俺の中の悪魔弱え……

んで、今はルーシイの家にいます。

……いや不法侵入ですけどちゃんとした正当な理由があるんだつて。

ギルドが壊されてまだ一日しか経ってないから一人での行動は避けた方が良くミラが提案。

そしてチームごとに今日は過ごすということに。

俺はエルザと二人でチーム組んでるんだけどフィアとかナツたちを放っておいては危ないんじゃないかね？という考えにいたつて今ここにいる。

「多いつての!!!」

ゴガアッ!!!

因みに今のは帰ってきたルーシイがナツの顔面にスーッケースを投げた音。

痛そうだなオイ。俺だったら泣いてるぞ絶対。

「おかえりルーシイ」

「よう、ルーシィ」

「……………お邪魔してる」

「世話になるぞ」

「……………」

「……………すまんルーシィ……………いろいろと」

「リヨウマだけはまともな考え持つてるのね……………」

あからさまに肩を落として溜め息を吐くルーシィ。

本当に申し訳ない。でも、これが妖精の尻尾なんだよ……………
フェアリーテイル

「で、なんでみんなここにいるの？」

「えっとそれはかくかくしかじかで……………」

「へえ…そうなんだあってそんな創作ものでしか使わないような言葉で状況が伝わるわけないでしょ!？」

「だって話せば長くなるし……………」

「長くなってもいい!!だからちゃんと説明をして説明を!!」

「あい。一人での行動は危ないからチームで固まるってことになったんだ」

「……………要するに安全対策」

「全然長くないじゃない!?　ってこらあ!!勝手に読まないでよグレイ!!」

「あ!!」

半裸のグレイが椅子に座って読んでいた複数の原稿用紙を鬼の形相で奪い返すルーシィ。

もしかして自分で小説でも書いてるのかな?　そうだとしたら今のグレイの行動はかな〜りダメなんじゃないかと思う。

「それにしても汗臭いなお前たち。同じ部屋で寝るんだ。風呂にぐらい入れ」

「やだよ、めんどくせー」

「俺は眠ーんだよ。入りたいならリヨウマと二人で入って来い」

「「な……／＼／」」

エルザと一緒に風呂！？

いやいやいやいやそんな嬉しい展開してる場合じゃねえし！！
今は緊急事態だし！！

「……………エルザ？（じとー）」

「な、なんだルーシー！！わ、私は別に期待してなどいないぞ！？」

「……………エルザ、本音が漏れてる」

「あい。正直なんだねー」

「ぬあああああああああ！？／＼／＼／」

顔を真っ赤にして煙を上げるエルザ。

何この可愛い生物。お持ち帰りしてもいい？

——
一時間後

「ねえ……例のファントムってなんで急に襲ってきたのかなあ？」

風呂から上がってきたルーシイが頭をタオルで拭きながらそう聞いてきた。

まあ確かにその点は気になる。何故このタイミングなのか。どうしてウチなのか。

「さあな……今まで小競り合いはよくあったがこんな直接的な攻撃は初めての事だ」

パジャマに換装したエルザがベッドの上に腰を下ろしてルーシイの問いに答えた。

アンタは人の家のベッドを占領するつもりですか……？

「じつちゃんもビビッてねえでガツンとやっちゃまえばいいんだ」

「ジーさんはビビってる訳じゃねえだろう。あれでも聖十大魔導せいいてんだいまどうの一人だぞ」

「聖十大魔導？」

「魔法評議会の議長が定めた大陸で最も優れた魔導士十人につけられた称号だ」

「へえー、すごおいー!!」

「ファントムのマスター・ジョゼも聖十大魔導の一人なんだよ!」

そういえばそうだった。

あのイカレ幽霊野郎もマスター・マカロフと同じ称号を持ってるんだっけ。

まあ、ファントムのマスター張ってるだけはあるってか。

「ビビってたよ!!ファントムって数が多いしさ!!」

「うわわ……」

「だから違うだろ」

「ああ。マスターもミラも俺たち妖精の尻尾と幽鬼の支配者の二つ

のギルドが争えばどうなるかを分かってるから戦いを避けてるんだ。魔法界全体の秩序を守るためになー」

魔法界のバランスというものは人が思っているよりもずっと脆い。大きな力を持っている魔導士ギルドが争いを起こせば周囲の自然や町に大きな被害を出すことがある。

そうなつてくると魔法評議院に責任問題が来る。

アイツらは嫌いだけどアイツらがいないことには魔法界が成り立たないことも事実。

複雑な世界なのさ。ここは。

「そんなに凄いの？ ファントムって」

「たいしたことねーよ、あんな奴ら！！！！」

「いや…… 実際、争えば潰し合いは必至。…… 戦力は均衡している」

そう。俺たち妖精の尻尾と幽鬼の支配者の実力はほぼ同じ。あっち

には強大な魔導士が多い。しかも人数が多いから数で押し切られてしまう可能性もある。

そして残忍だしな……

「ファントムには強大な魔導士が多くいるんだ」

「マスター・マカロフと互角の魔力を持つと言われている聖十大魔導のマスター・ジョゼ。そして向こうでのS級魔導士にあたるエレメント4・一番厄介だとされるのが鉄龍くろがねのガジル。今回のギルド強襲の犯人と思われる男。鉄の滅龍魔導士」

「滅龍魔導士！？」

「「（フン）」」

「ナ…… ナツとリヨウマ以外にもいたんだ…… じゃ、じゃあそいつ…… 鉄とか…… 食べちゃう訳！！？」

まあ、鉄の滅龍魔導士だしそうなんじゃねーの？

俺は水の滅龍魔導士だから水分食べるしナツは火の滅龍魔導士だから火を食べる。

滅龍魔導士は食べるものが二つ名に入ってることが多いから分かりやすいんだよ。

「それじゃあもう寝るとしよう。疲れはとっておかないとな」

エルザはそう言ってベッドに潜り込む。

それを見ていたルーシィがはああああ……とため息をついて渋々ソファの上で毛布をかぶって横になった。

ナツとグレイとハッピーとフィアは床にごろんと横になってすでに寝ている。

俺はそんな光景を見て一人思っていた。

もうギルドが壊されるより酷いことなんて起きるんじゃねぞと……

マグノリアの街

南口公園

まだ朝だというのにそこにはかなり多くの人が集まって騒然としていた。

まさか……クソッ!!

「すまん通してくれ。ギルドの者だ」

「どいてくれ!頼む!」

嫌な予感に包まれた俺たちは集まった人たちの間を縫って進んでいく。

この方向は南口公園の大樹の方向だ。

この公園のシンボルとされている大樹。

かなりの年月成長している大樹だしマグノイアの名所としても有名な。

つて今はそんなことどうでもいい。

「なっ……」

「くっ……」

「ファントムウ……」

「きゃっ……」

人ごみを抜けた先には目も当てられないような光景が広がっていた。先ほど言っていた大樹の幹に見覚えのある三人の魔導士がぼろぼろの状態ではりつけにされていたんだ。

一人は文字の魔法を使うレビィ・マクガーデン。

ルーシィと仲が良くてよく一緒に話している少女だ。

そして残り二人はジェットとドロイ。チーム・シャドウギアというチームのメンバーだ。レビィもそのチームの一員で三人でよく仕事に行っている。

その三人が今俺たちの目の前で血まみれで張り付けにされている。

「レビィちゃん……」

「ジェット!!ドロイ!!」

「っ……」

「ファントム……」

ファントムロード

幽鬼の支配者の野郎オ共が調子に乗りやがって……

どこまで俺たちをバカにすれば気がすむんだ……

大切なギルドを破壊したと思ったらお次はギルドより大切な妖精の
フェアリ
ーテイル尻尾の仲間がターゲットですってか？

許さねえ……絶対に許さねえ……

ザッ

後ろから誰かが良いおいよく地面を踏みしめる音が聞こえてきた。

俺はその音に釣られて後ろを振り返る。

そこにいたのは白い魔導着を着用したマスター・マカロフの姿が。

マスターはゆつくりとこちらに向かって歩いて来、大樹に張り付けにされているレヴィ達に視線を向けた。

その顔に浮かんでいる表情は怒り怒り怒り。

今まで見たこともないような顔がそこにはあった。

マスターの後ろに集まっている仲間たちも皆全く同じ表情をしている。
バカ

「ボロ酒場までならガマンできたんじゃないかな……」

ぞわっ

マスターから大量の魔力が漏れ出している。

怒りとはここまで人を怖ろしいものに変えてしまうものなのか。

あんなに温厚なマスターが心の底から怒り狂うほどの光景。
ガキ

ギルドマスターにとってギルドの魔導士は自分の子供そのもの。

俺たちにとってマスターは親そのもの。

フェアリーテイル
妖精の尻尾は大きな家族。

共に支え合い共に生きていく。

そして家族を傷つけた者は……絶対に許さねえ。

バキィ！！

マスターの握力に耐えきれなかった杖がマスターの手が触れている部分から真つ二つに折れてしまった。

その光景を俺たちはただ黙って見続ける。

その胸に抱く気持ちは皆同じ。

「ガキの血を見て黙ってる親はいねえんだよ……」

大切な仲間が傷つけられた。

大切な家が破壊された。

大切な家族を馬鹿にされた。

フェアリーテイル
俺たちは妖精の尻尾。

仲間が傷つくことを何よりも嫌う魔導士の集まり。

家族の敵は絶対に滅ぼす。

それがたとえ俺たちと同じぐらいの実力を持っている魔導士ギルドだとしても滅ぼす。

跡形もなく壊しつくしてやる。

ファントムロード
これは幽鬼の支配者からの挑戦状だ。

だったら乗ってやる。その挑戦。

こっちだっていつまでも逃げてばかりじゃねえんだよ……

「戦争じゃ！！！！！！！！！！」

「应！！！」

そして俺たちは足を進めた。

ファントムロード
目指すは幽鬼の支配者の本部。

完膚なきまで叩き潰してやる……

俺たち全員は怒りを胸にファントム滅殺へと足を進めた。

これは俺たちの復讐。

正義の者の復讐だ。

妖精の怒り（後書き）

「ギヒッ！」

B
y ガジル

幽鬼の支配者への復讐（前書き）

「俺の本当の力を見せてやる……」

B
Y
リョ
ウマ

幽鬼の支配者への復讐

「やつと着いたか……」

マグノリアの街から歩いて幽鬼の支配者のギルドへと来た俺たち。それぞれの魔力を練りに練って完全に戦闘準備を終わらせている。

「さて……どうやって入る？ やっぱりドアぶつ飛ばすか？」

「異議なし」

とりあえず入館方法は決まった。ドアをぶつ飛ばす係はナツにやっ
てもらおう。一番攻撃力があるしナツの炎でギルドが燃えたら一石
二鳥だしな。さて、俺はどいつから倒そうかな？ やっぱリエレメ
ント4とかいう連中をぶつ飛ばしたい。鉄龍くろがねのガジルはナツに任せ
よう。アイツの方がガジルに怒りを覚えているからいい感じに暴れ
まわってくれるだろうし。

よし。方針も決まった。

「ナツ。よろしく」

「おう！」

俺が声をかけると夏の周りの空間が揺らめきだした。これはナツの体から漏れる炎が空気を暖めているから起きている陽炎。普通はかなりの高温でしか発生しないのだけど今のナツから漏れる炎の温度はちよつと離れているエルフマンに大量の汗をかかせるぐらいだ。それぐらい怒っているということだろう。

「みんな離れてろよ……ぶっ飛ばええええええええええ！！」

「!!」

ゴツッシャアアアアアアアアアアアア!!!!

ナツが全身の力を込めてファントムのギルドの正面玄関をぶっ飛ばした。なんか今のナツの攻撃に巻き込まれたファントムの魔導士がいたような気がするがどうでもいいや。どうせみんな潰すんだし。

「フェアリーテイル妖精の尻尾じゃあああ!!!!」

「「「「「うおおおおおおお!!!!」」」」」

マスターの叫びを合図に俺たちはファントムの魔導士たちに突っ込んでいった。ナブはその怪力で魔導士をぶっ飛ばしマックスは砂の魔法で視力を奪う。

「ぐっ……強え……」

「兵隊どもの強さが半端ねえだろ!?!」

俺たちの鬼気迫るオーラに思わず逃げ腰になるファントム。お前たちはまだ分かっていない。俺たちよりもトサカに來てるのは一体誰なのかを……

「ふんぬっ!!」

「「ぎゃあ——!!」」

「ひ……ひい!バケモノ!!」

巨大化したマスター・マカロフが足元に群がるファントムの魔導士を踏み潰し叩き潰している。あれが巨人の怒りか……よかった味方で。

「そのバケモノのガキに手え出したんじゃ！！人間の法律で裁かれると思うなよおおおおお！！！」

「ぐはっ！！！」

完全にキレているマスターがギルドを壊さんとする勢いで暴れまわっている。マズイな……熱くなりすぎて冷静さを欠いてる。このままじゃ実に小さなミスをしてしまう可能性が……ま、いつか。そんなこと絶対に聞くような状態じゃねえし。俺たちには何の害もねえんだしな。

「はあ……マジで死ぬよお前ら。【海龍の羽ばたき】！！！」

俺が両手を横に伸ばすと海龍の魔力が水となって縦横無尽にギルド内を駆け巡り始める。この技は防御メインの水の滅龍魔法において唯一敵の動きを止める技。この水が相手の足に絡みついてどんな敵も逃がさない。若い女性には使っちゃだめだぞ」おもに見た目と年齢制限上の理由で。

「なっ……足が動かねえ！？」

「ぐあ！！ぶ、武器が！！！」

「はいはいその物騒なモン捨てて呼吸困難で堕ちろ。キル・ユー」

「「「ぐあああああああ！！！！かはっ……」「」「」」

これで結構なフロントム撃沈。死んではないだろうけど水恐怖症にはなるかもね。まあ、自分がフロントムなんか言うクソ魔導士ギルドに入ってしまったことを呪うんだな。他のギルドにいたらもつとまともだったはずだろうに。バカな奴ら。

「私も負けてられんな！！換装【天輪の鎧】！！！！【循環の剣】！！！！」
サイクルソード

「くくくわあああああああ！！！！！！！」

妖しい笑顔でファントムの連中を葬っていくエルザさんマジパネエ
つす。見るよあの顔。絶対に夢に出てくるって。怖いもん。あれじ
やあ【妖精女王】^{テイターニア}っていうより【妖精霸王】^{ヴァルキリー}って感じだろ。

「ガアアアアジイイルウウウウウ！！！！！！」

「ギヒッ！！火の滅龍魔導士のチカラってのはそんなモンなのかよ
！！なあ？」

「うつせえ！！俺は絶対にお前を許さねえ！！【火竜の咆哮】！！
「ギヒッ！【鉄龍の咆哮】！！」

ガガガガガガ！！！！

ナツの火竜の咆哮とガジルの鉄龍の咆哮がぶつかり合って耳に触る
金属音を辺りにまき散らす。ぐう……これはこれでいろいろとキツ
イもんがある……

「ジョオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！出てこんかい
いいいい！！！！」

「おいおいマスター大丈夫かよ……」

「大丈夫なんじゃね？ どうせ壊れるのはファントムのギルドなん
だし」

「余所見してんじゃねえよお！！！！」

「五月蠅い雑兵が！！！！」

「不意打ちとは……漢じゃねえなあ！！！！」

「くわふえ！！！！」

俺とエルフマンの背後から魔法剣を振りかぶって襲ってきたファントムの連中が拳一つでダウンさせられた。相手が悪かったな。より

にもよって俺とエルフマンを狙うとは……

「ココは任せたぞ！！ワシは二階へ行ってくる！！」

「お気をつけてマスター！！」

マスターが二階に上がっていったか……これはマスター・マカロフ対マスター・ジョゼが勃発するんだろうか……天変地異とか起きなければいいけど。まあ、今はそれよりもファントムとぶつ飛ばす方が優先だな。

「一気に力タを着けてやる！！【海龍の咆哮】！！！！」

「「「「うああああああああ！！！！」」」」

「次！！【海龍の鉄拳】！！！！」

「「「「ぐああああああああ！！！！」」」」

「トドメ！！滅龍奥義【海龍蒼刃破】！！！！」

「「「「ギヤイイアアアアアア！！！！」」」」

俺の攻撃魔法は主にこの三つだ。ハッキリ言って攻撃力は期待できねえ。でも、攻撃力って言うよりもこの技は相手に致命傷を負わせる技だ。切れ味をいつもの数十倍よくした俺の水の味はどうですかあつてなあ！！！！

「ギヒッ！！テメエが【海龍】^{リヴァイアサン}のリヨウマか？俺とも遊んでくれよ

！！なあ！？」

「くっ……鉄龍^{くろがね}のガジルか……」

「随分と俺様も有名もなったもんだな！！ええ？オイ！！【鉄龍剣】！！」

「チッ！！【海龍の波動】！！」

ガイイイイイイン！！！！

ガジルが剣に変形させた腕を俺に向かって振り下ろそうとした瞬間、俺の目の前に巨大な水の盾が出現した。自分の攻撃が簡単に止められてしまったことが気に食わないのか不快な表情を浮かべるガジル。これが俺の滅龍魔法の神髄。海龍の鱗は全てを阻み、海龍の水は全てを切り裂く。海龍の叫びは全てを飲み込み、海龍の翼は全てを受け付けない。その魔力を纏いし魔導士には絶対の防御力アリ。っていう伝承があるぐらい水の滅龍魔導士の防御力はピカイチだ。こんな剣ひとつ防げねえわけない！！

「ヘッ！！そんなモンか？ 鉄くずヤロー」

「ああ！？ 海蛇如きが何言ってやがる！！【鉄龍槍】！！！！」

「だーかーらー……効かねえって言ってるだろ！！ナツ！！」

「おう！！【火竜の咆哮】！！」

「なっ……！？ 不意打ちだと！？」

別に卑怯じゃないですから。だってさっきから自分の攻撃のタイミングを今か今かと待っていたしナツの奴。流石にがじるを横取りしたのはまずかったかなー？と思ったからね。トドメはあげるよ。

しかし、現実はそう甘くはなかった。

ドオオオオオン！！！！

「な、なんだ！？」

俺たちが勝利を確信したその時、上から何かが降ってきた。な、何が落ちてきたんだ……？

「……マ、マスター!?」
「ああ……ワシの……魔力が……」

そう。上から一階に落ちてきたのは妖精の尻尾のマスターだったんだ。外傷は無いけど何故か皮膚が真緑に染まっている。これは……魔力を失ってる!? 上で一体何があつたんだ!?

「チィ!! みんな、撤退だあ——!! 一旦ギルドへ戻るぞ!」
「……撤退!?」

魔力ゼロで床に倒れているマスターを見てついにエルザが撤退勧告を出した。その判断は正しいな。今のマスターを見てみんなの戦意が喪失している。このまま戦っても負けるのは目に見えてるし。

「漢は撤退などせんのだあ——!!」
「オイ、エルザ!! 俺たちはまだ戦え——」
「頼む……みんな……撤退してくれ……」
「……っ!?」

あのエルザが弱音を吐いた。その事実が俺たちの心を揺さぶるのはそう難しくない。誰よりも強気で誰よりも強いエルザが涙を流して『撤退』と言った。それほどマスターの存在は大きいのだろうな。

「エルザの言うとおりだ!! 殿は俺がやる!! みんなは速くギルドへ戻れ!!」

エルザの行動を見たばかりのみんなは反論をすることもなく全力でギルドへ向かって走っていった。その時にナツがハッピーとファン

トムの魔導士一人とどこおか違う方向へ走っていったが放っておいても大丈夫だろう。何があったのか知らないがナツなら無事に帰ってくる。そう信じるのが俺にはできたんだ。

「……逃がすかよ！！死ねえ！！！！」

さて……みんなも見えなくなってきたことだしこいつらを滅ぼす
としますか。

「はあ……つたく。このモードはあまり多用するなつてエルザに言
われてんだけどなー……魔力の消費激しいし」

「何をこたこた言つてやがる！！」

「うぜえ。お前らココでゲームオーバーって言つてんだ。見せてや
るよ……海龍と火竜の全力の怒りつてヤツをな！！【モード海炎龍】
！！！！」

モード海炎龍。

それは俺の海龍の魔力とナツの火竜の魔力を合わせたモード。
以前ナツと戦ったときにまだ水分の吸収ができなかった俺は魔力ゼ
ロの状態になった時にナツの全魔力を吸収した。そしてそのときか
ら魔力を大量消費する代わりにこのモードで戦うことができるよう
になったんだ。

「フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士嘗めんな！！！！【海炎龍の咆哮】！！！！」

「……うおおああああああああ！！！！！！……」

火竜の炎を纏った海龍の水がファントムの魔導士を一掃した。流石
の破壊力だ。やっぱり魔力を大量に消費するだけは……ある……

……な……

バタッ

自分の魔力を大幅に放出してしまったので立つこともできなくなっちゃった。

やっぱり一回の使用でもここまで追い詰められるか……

「かはっ……ま、まあファントムは……一掃したし……結果よければすべてよしってこと……で……（ガクッ）」

俺の意識はそこで途絶えたんだ。

「っー!!」

みんなをギルドへと向かわせているとき、何故か頭の中に鋭い痛みが走った。

なんだ……この背中から走る悪寒は……

「まさか……リヨウマか!？」

そういえば殿を務めているはずのリヨウマがまだ帰ってきていない。まさか……やられてしまったというのか!?

「グレイー！私はリヨウマを助けに行ってくる！！お前はみんなを頼む！！」

「リヨウマ！？わ、分かった！！任せろ！！」

「ファイア！！」

「……………了解。振り落とされるなよ」

ファイアの【翼^{エーラ}】で今来た道に戻っていく。リヨウマが負けるなどあり得ないと思うが、もしあのモードを使用していたら……

「無事でいてくれ……………リヨウマ……………」

私はファイアのMAXスピードに耐えながらリヨウマのもとへと急いだ。

「……………いた」

「……………リヨウマ……………」

【翼】で飛ぶこと数分。ついにリヨウマを私たちは発見した。外傷はあまり見られないがいつもの海龍の魔力が感じられない。おまけにリヨウマの周囲には服が焦げていたりびしょ濡れになっちたりするファントムの魔導士どもが倒れている。やはりあのモードを使っただのか……

「しっかりしろリヨウマ!!」

「うう……エルザ……?」

良かった!まだ意識はある。早くポーリユシカさんのところへ運べばまだ間に合う!!

「大丈夫だ!すぐにポーリユシカさんのところへ運んで行ってやるからな!!」

「す……すまねえ……使うな……って……言われてたのに……モード海炎龍を……」

「そのおかげでみんなは無事にギルドへ戻ることができたんだ!!それよりも早く魔力を……そうだ!!換装【海王の鎧】!!」

「……どうするんだ?」

「こうするんだ!!【海王斬】!!」

バシヤア!!

私の海王の鎧は攻撃時に水を発生させる。それを水の滅龍魔導士であるリヨウマにぶつけるとどうなるか。それは……

キュウウウウウウウウウウウウウウウ

「……………御馳走様。食ったら力が湧いてきた」

……リヨウマが失った魔力を回復することができるということだ。

「さんきゅーエルザ。おかげで全快とまではいかねえが魔力が戻った」

「例には及ばん。私はお前の相棒だから……ひゃっ!？」

突然、リヨウマが私を抱きしめてきた。私よりも少し小さなリヨウマの瞳が口元のすぐ近くにある。

「な、なんだいきなり!?!?!」

「護れてよかった……」

「え?」

「大事な仲間とお前を護れて……よかった………（ガクツ）」

リヨウマが突然気を失った。ど、どうしたというのだ!? まだダメージが残ってるのか!?

「リヨウマ! リヨウマ!」

「………そんなに焦らなくてもいい。ただ疲れて眠っているだけだから」

「………は?」

「ぐうー……」

顔が熱くて死んでしまいたかった。

幽鬼の支配者への復讐（後書き）

「仲間を売るぐらいなら死んだ方がマシだ!!」

B
y エルザ

決戦開始（前書き）

「どうもリヨウマです。やっぱりイラストがあつた方が創造し易いかな〜っと思つたので俺のイラスト乗せます。上手いか下手いかには触れないで!！」

> i 3 5 6 0 8 — 3 4 1 6 <

決戦開始

「ルーシイがああハートフィリア家の一人娘ねえ……」

フェアリーテイル
妖精の尻尾のギルドへ戻った俺。

その後起きたら何故か頬に紅葉模様の赤い跡が。

エルザに聞いたら顔を真っ赤にして『な、なんでもないぞ!!』と逆の頬にコークスクリューパンチを浴びせられました。もうアイツって魔導士じゃねえよな。強さ的に。

んでその後、ルーシイがナツとハッピーと帰ってきて今回のファントムの件について話してもらったんだけど……その際にルーシイがああハートフィリア家の一人娘だということが発覚!!
というのが今までの流れ。

「ルーシイ、なんで黙ってたの？」

ルーシイを下から見上げてハッピーが心配そうな顔を向ける。

その横ではフィアが自分の爪を研いでいる。

床を傷つけんなよアホ。

「黙ってるつもりじゃなかったんだけど……家出中だから言い辛くて……」

「ルーシイ……」

家出中、か。

親の代わりであったドラゴンを探している俺とナツにとっては無縁の話だ。

だって俺たちは家出したんじゃないくて捨てられたワケだから。

なんの連絡もしてくれなかったんだよね……置手紙ぐらいしていいばいいのに。

「でも……ファントムのチカラなんかを借りてあたしを連れ戻そうとしている辺り最低だよな……あの人って昔からそーなんだ……目的のためなら手段を選ばない……でも、元を正せばあたしが家出したことが原因なんだよね……」

「い、いや……悪いのはその親父で……」

「いや、ファントムだろ」

エルフマンが余計なことを言おうとしたところを 그레이 が遮る。

それにしても娘を取り返すっただけでここまでやるかフツ！。

もつと円満な解決方法があったハズだ。

もつと平和で安全な方法があったハズだ。

なのにルーシイの親はよりにもよってファントムなんかに依頼を出した。

その時点で人間としていろいろと終わってるんだっての……

「あたしの身勝手な行動のせいでみんなにこんなに迷惑をかけちゃって……あたしが家に戻れば済む話だよな……」

「……………ルーシイ……」

ルーシイの顔に影が入る。

彼女は辛い家から逃げ出した。

自分の自由を求めて家出した。

そして妖精の尻尾フェアリーテイルに入ることになった。

それは単なる偶然なのかもしれない……でも、俺たちはこれが必然だと信じてる。

偶然なんてこの世にない。

あるのは偶然に似た必然だけだ。

「ってかルーシイがお嬢様ってのも似合わねーよなー。そう思わね
リヨウマ？」

「……え？」

「ああ。ルーシイはお嬢様って言うより家賃払うために仕事を頑張
っている仲間って言葉が似合うと思う」

「仲間……」

「ルーシイ。自分が戻りたくないところに戻って幸せになれるの？」

「……それは……」

「今のお前はハートフィリア家のルーシイじゃねえだろ？ 妖精の
尻尾イテイルのルーシイだ」

「……ッ！？」

「ルーシイ。ナツは不器用だからこんなに回りくどいけどな、多分
こう言いたいんじゃないか？ 妖精の尻尾ココがお前の帰るところだっ
てな」

帰りたくないなら帰らなければいい。

帰りたいなら帰ればいい。

でもどっちを選んだとしてもココがルーシイの帰るところだとい
うことには変わりがない。

妖精フェアリーテイルの尻尾とは家族そのもの。

ギルドは家そのもの。

だからこそココのみんなは優しいし面白い。

みんな心から笑って過ごしているから。

「……っ……うう……」

「オイオイ泣くなよルーシイ。らしくねえなあ」

「お……漢は涙に弱いのだ……」

「…………珍しく同感」

「リヨウマ……俺のセリフ取りやがったな……」

「うつせえ。お前が口下手なのがダメな『ズウウウウン!!』ん
——!?!」

ギルドの外から凄まじく巨大な物音が聞こえてきた。
しかも少しずつこっちに近づいてきてる……

「外だ——っ!!」

上からアルザックが血相を変えて俺たちを呼びに来た。
そんなこと言われずともヤバイモンが近づいてきてることぐらい分
かってる。

そう思っていた俺は一目散にギルドの外に駆けだした。
外に出た俺の目に信じがたいものが映りこんでくることとなる。

「……何だあれはっ!?!」

「ギルドが……動いてる……?」

そう。近くのデッカイ湖の中をファントムのギルドが動いてやって
きているんだ。

あんな細い脚六本でよく動けるよな……

『魔導集束砲【ジュピター】用意。消せ』

ジュピター? 魔導集束砲? 聞いたことない名前だな……一体何
をやる気——

「マズイッ!! 全員伏せろお——!!」

「……うわあああああ!!」

なんだ!?! エルザが突然叫びだすぐらいのヤバイモンなのかあれ

は！？

つてゆーか魔導集束砲って……あの魔導集束砲！？
ギルドごと俺たちを滅殺する気かよー！！

「ギルドはやらせんっ！！！」

「金剛の鎧！？ エルザのやつジュピターを受け止める気か！？」

「いくら超防御力を誇るその鎧でも……」

「うるさいっ！！早く伏せろお——！！！」

「エルザあ——！！！」

「ナツ！！アンタも伏せなさい！！！」

エルザがジュピターを受け止める？

それってイコール、エルザが傷つくってことなんじゃねーのか？

そうだ。あんな強大な魔法を喰らったら流石のエルザでも一溜りも
ねえ！！

『魔導集束砲【ジュピター】、発射！！』

ドオオオオオオオオン！！！！

轟音と共にジュピターが発射される。

しかし今の俺にはそんなこと考える余裕はない！！

ドンッ！！

「なっ……」

「……リヨウマ！？」「……」

ジュピターに向かって防御態勢を取っていたエルザをみんなの方へ
蹴り飛ばす。

今は方法を考へてる余裕はないんだ。蹴つたことは後で謝罪するか
らな！。

「『闇よりも深き蒼。鋼鉄をも穿つ蒼。何物も通さぬ強固な蒼。我
は海龍。その名を持つてここに命ず！』絶対的な海の守護よ！』こ
こに顕れたまえ！』究極滅龍奥義【海龍蒼護盾】」！！！！」

俺の目の前に海龍二匹が円を描くような模様が付いた巨大な水の盾が顯れる。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！

くっ……なんて威力だ……シーサラに教えてもらった滅龍魔法で一番の防御力を誇るこの魔法が押し負けそうになるなんて……

「ぐう……うわあ ああああ！！！！！！」

バ
シ
ユ
ツ
！
！

「ふ……防ぎやがった……」

「あのジュピターを……」

「でも……そのせいでリョウマは……」

無事にジューピターを止めることには成功した。

けど……もう体がぼろぼろで動かねえよ……痛え……

「この馬鹿者！！」

「エルザ？」

金剛の鎧を着たままのエルザが俺を抱き寄せる。

今の彼女の左目からは涙が大量に流れている。
また…悲しませちまったな……

「鎧が……刺さってるって……」

「そんなことを言っている場合か！…すぐにポーリュシカさんのもとへ連れて行ってやるからな！」

「俺は……大丈夫……そ、それよりもあのジュピターを壊さねえと……」

『マカロフに続きリヨウマも戦闘不能……もう一度だけ言おう。ルーシィ！ハートフィリアを渡せ』

ファントムのマスターであるイワンの声が響いてくる。

ルーシィを渡す……？

ハッ！ 笑わせてくれるねえ……

「仲間を見捨てるギルドがどこにある……」

「ルーシィは俺たちの仲間だ……」

「……みんな……」

「「仲間を売るくらいなら死んだ方がマシだ……」」

「……っ」

「オオオオオオオオオ……」

「俺たちの意志は変わらねえ……絶対にルーシィを渡すもんか……！お前らをぶっ潰してやる……」

妖精みんなの尻尾がルーシィを渡すまいと叫んでいる。

これが俺たちの意志。

仲間は何よりも大切なもの。

何があっても見捨てはしない。

『ならば次のジューピター発射までの15分間、恐怖に脅える……!』

「また発射するのかよ……」

「あんな魔法を防げるのはリヨウマとエルザぐらいだろ!？」

「でもリヨウマは今こんな状態だし……」

「俺が行く」

ナブたちが言い合いをしているとナツがファントムのギルドを見つめて言った。

やっぱりな。お前なら行くと思ってたよ。

「15分だろ？俺が止めてやる。行くぞ、ハッピー……!」

「あいさー……!」

「エルフマン、俺たちも乗り込むぞ……!」

ナツに続いてエルフマンと 그레이 もファントムのギルドの方へ突っ込んでいった。

これでうちのギルドのトップクラスのメンバーが三人突っ込んだワケか。

いや、後一人いるな。

俺の大切な相棒が。

「エルザ、お前も行っていいぞ」

「なっ……しかしお前をまだ運んでない……!」

「だから俺は大丈夫だって……ドラゴンスレイヤーそれでも滅龍魔導士だぜ？ 打たれ

強いんだっての……」

「しかしお今のお前は立っているのもやっとの状態『いいから行きなッてエルザ』い——」

カナのやつ……良いところを持っていく気かよ……

「少しぐらいカッコつけさせてやりな。数少ないチャンスっぽいし」
「カナ……」

それでもエルザは躊躇いを見せている。
こうなりややるしかない。

羞恥心なんてぶっ飛ばせ!!

——フッ——

「「「「「なあっ!?!」「」「」「」

もう言わずとも分かるだろう。

ごちゃごちゃいってるエルザの口を俺の口で塞いだんだ。
う、うるさいっ!!文句なら後で聞くから!!

「な、なななな／＼／＼／」

「……………処理落ちしてるけど?」

「大丈夫だ……………行って来い、相棒!!!!!!!!!!!!!!」

「っ……………ああ!!フィア、ついてこい!!!!!!」

「……………了解っ!!」

俺に喝を入られたエルザはフィアと一緒にファントムのギルドの中へ行った。

これで問題ないか……あとはあいつらが何とかしてくれるだろう。

「とゆーわけで、ここは俺たちで何とかするとしますか」

「バカリヨウマ……………一番の戦力を中に送り込みやがって」

「お前も強い方だろうがカナ。ここを切り抜けねえと酒が飲めなく

なっちまうぜ？」

「それもそうかもね」

「マカオー！ワカバー！！まだ戦えるか？老兵ー！！」

「うるせえ若造ー！！」

「俺たちはまだまだ若いんだってのー！！」

「ナブー！！ビジターー！！今日ぐらい活躍しろよー！！」

「了解した」

「余計なお世話だー！！」

「アルザックー！！ビスカー！！照準をちゃんと合わせとけよー！！」

「了解よー！！」

「任せてくれー！！」

「ウォーレンー！！マックスー！！ラキー！！とりあえず死ぬなー！！」

「「「一番ひどい扱い！？」」」

よし。みんなやる気はあるみてえだ。

目の前には大量の【幽兵^{シェイド}】。

でも……俺たちの敵じゃねえ！！

「行くぞお前らー！！頂上決戦だー！！！！！！」

「「「「「「「「オオオオオオオオオオオオー！！！！！！」」」」」」」

エルザ……こっちは俺たちが何とかするからお前も頑張つて来い！

！！！！！！

決戦開始（後書き）

「ワシを本気で怒らせたようじゃな……」

B
Y
マカロフ

閑話休題（前書き）

タツヤ＝カオスロッド

18歳

容姿＆説明

目が隠れるぐらいの長い黒髪。でも後ろ髪は首元よりは上にある。たれ目でもなくツリ目でもなくて顔のつくりはまとも。

S級魔導士。ミラのが好き。実力はフェアリーテイルで圧倒的にトップ。よく道に迷う。

魔法名

光闇魔法<ライト&ダークネス>

服装

黒いフード付きの魔導士用のコートを着ている。下は黒い長ズボン。デコにギルドの紋章あり。

閑話休題

リ「どうも。主人公のリヨウマ」ポセイジオです」

エ「ヒロインのエルザ」スカーレットだ」

リ「え？ エルザってヒロイン確定なの？」

エ「なんだ不服なのか？」

リ「いや別に……」

エ「文句が無いなら先に進むぞ？ さて、今回は本編ではなくキャラ人気投票のお知らせだ」

リ「まだ全員登場してないんだけどねー」

エ「そこっ、うるさいぞ！！ コホン。投票期間は今年の12月31日の11時59分までだ」

リ「要するに今年ギリギリまでオーケーってこと」

エ「原作キャラもこの作品のオリジナルキャラも投票して良いぞ」

リ「まあ、とりあえずはまだ登場していない2人のキャラクターについての話を紹介しようと思ってる」

エ「というわけでタツヤ」ナイトロッド視点で送るストーリー、スタートだ」

「はあ……また迷っちゃったよ……」

僕は真っ暗な森を一人で歩いている。

自己紹介が遅れたね。僕の名前はタツヤ「カオスロッド」。
フェアリーテイル
妖精の尻尾のS級魔導士なんだ。

使う魔法は【光闇魔法<ライト&ダークネス>】。

まあ、簡単に言うとかで攻撃して闇で防御する魔法って感じかな。
んで、今はクエストの帰り道なんだけど……道に迷っちゃったんだ。

「また帰りが遅くなってミラに怒られちゃうよ……」

ミラは僕に怒る時だけ魔人と呼ばれてた時の雰囲気を出すから厄介
なんだよ……

ツてゆーかなんでミラは僕ばかり厳しく接してくるんだろう？
よく分からない。今度聞いてみよう。

「あ。あんなところに集落が。お邪魔させてもらおう」と

もう暗いし一人は危ないからね。

僕はそう自分に言い訳しながらその集落の方へ歩いていったんだ。

『すまんウエンディ!!』

『絶対に許さない!!なんでトウイはいつもいつもそうやってケガ
ばっかりして帰ってくるの!?!』

集落に近づいた途端に僕と同じぐらいの年齢の青年と年下ぐらいの

少女が追いかけてくをしていた。
何だろうねこの状況。かなり入り辛いや。
まあ、とりあえず二人を見守ることにしようっと。

『だって敵が強かったんだって!!』

『それならケガする前に戻ってこればいいでしょ!？ そんな風だからトウイはシャルルにありだこーだ言われちゃうんだよ!!』

『ぐっ……言い訳できん……』

言い訳できないんだ。

『で、でもさあ!オレだってやる時はやるだろ!?!』

『何言ってるの。アンタが倒せるのってせいぜいラクリマジロぐらいでしょ?』

『出たよ白猫……』

あの猫……ハッピーとフィアと同じ種族なのかな?

なんて偶然。いや、必然か。

『だれが白猫ですって? 私にはシャルルっていう立派な名前があるわよ』

『シャルルからも言っちゃってよ!!トウイってばまた一人で仕事に行っちゃったんだよ!?!』

『ちよっ、おまっ……チクってんじゃねーよ!!』

『また一人で? ふーん……』

『なんだよその表情は』

『で 仕事には失敗したと。この負け犬』

『うつ』

『ったく……アンタもいい加減、ウェンディを頼ったら? 傷つけたくないってことはわかるけどね』

『え？／＼／＼』

『な、なに顔を赤く染めてんだ！！お、オレは別にそんなこと考えてるわけじゃ——』

『ウエンディ、そういえばこの前トウイが近くの街で美人さんに——』

『うわああああああ！！ストップストップ！！ってかなんでお前がそのことを知ってるんだ！？』

『ついていったからに決まってるじゃない。ってそれよりもウエンディの方に意識を向けたら？』

『え”』

僕の目にははつきりと移ってる。

ウエンディと呼ばれる少女が修羅を纏って目以外笑っている光景が怖い……昔のミラを彷彿とさせる姿だ……

『トウイ？』

『……なんでしょうか』

『そこに正座』

『いや……その……ここって石畳だからかなり痛いと思うんだよね』

『天空魔法で呼吸を止めてほしいのかな？』

『正座……しますう……』

うわぁ……かなり痛そうだね。

見てるこっちも脛が痛くなってきたよ……

『で、街で美人さんに何をしたの？』

『黙秘権を施行します』

『ナンパしてたわ』

『シャルルさん！？ いやマジでなんではらしちゃってんの！？』

ホントに勘弁してよ！！これ以上状況を悪化させないで！！』

必死にトウイと呼ばれる青年がシャルルと呼ばれる白猫に訴えをし
てる。

でもあのシャルルって言う猫かなりのドSみたいでトウイを見下し
て妖しい笑みを浮かべてるね。

ここにもリヨウマ君とエルザさんのような上下関係があつたなんて

……

『ナン…パ……？』

『ひい！…うえ、ウエンディ！？ その後ろにいる天竜はきつと幻
覚だよなあ！？ そうだよなあ！？』

『ふんツ！…トウイなんかもう知らない！…！』

『……かはっ』

「ええええええええええええええええ！？ 今までのどの攻撃よりも今
の言葉がクリーンヒットしちゃったのおおおおおお！？」

『アンタ誰？』

「あ」

僕は出てくるタイミングと方法を間違えちゃったみたいだ。

「えっと……妖精の尻尾フェアリーテイルのタツヤ〓カオスロッドです。ちょっと迷
子になっちゃって……」

「妖精の尻尾！？ おい聞いたかウエンディ！…あの妖精の尻尾の
魔導士だつてよ！…」

「うん！…あ、あの……ギルドの紋章を見せていただけませんか？」
「ん？ 別にいいよ」

そう言つて僕は長い前髪を上にあげて黒の紋章をウエンディたちに

見せた。

なんでこんな変な位置に紋章があるかというと、僕はミラと一緒に妖精の尻尾に入ったんだけどその時にミラが悪乗りして僕のおでこにスタンプを押しちゃったんだ。子供って怖いね。

「うおおおお！！すつげえマジで妖精の尻尾の魔導士だ！！」

「ウチのギルドは弱小だからね」

「それを言っちゃったら終わりだと思うけど……」

「ってココって魔導士ギルドなの？　僕はてっきりどっかの村かと……」

僕がそう言つとトウイ君達三人の顔に影が落ちた。

え？　なんか僕地雷ふんだ？

「そつだよな……ケットシエルタイ化け猫の宿って弱小だから存在すら知られてねーよな……」

「私たちは頑張ってるんだけどね……マスターが一步も外に出ないから定例会にも参加しないし……」

「大体ウチのギルドって地味すぎるのよ。もっとうっ派手にできないのかしら……」

「あ、あははー……」

思わず乾いた笑いを零す僕。

だ、だってこの状況は想像を絶するほど辛いんだよ？

しかもウェンディたちが遂に地面に座り込んで下を向いちゃったし……

「そ、そういえばトウイ君とウェンディちゃんとシャルルさんってどんな魔法を使うの？」

よしっ！！ナイス話題の提供だ僕！！これで少しはトウイ君達の気も紛らわせることができるはず！！
でも……現実そんなに甘くはなかったんだ。

「オレの魔法？ そんなのは今回の話のあとがきに載ってるよ」

「私の魔法は原作読めばわかるでしょうし……」

「私はただ翼が生えるだけね……」

「な、なんてネガティブなギルドなんだろう……」

僕はそんな三人を置いて化け猫の宿を後にしたんだ。
め、目指せ妖精の尻尾のギルド！！

閑話休題（後書き）

トウイ＝マテリアル

18歳

容姿&説明

黒髪で跳ねが少ない。顔は中性的で目つきは優しい。

テンションが高く、ムードメーカー的な存在。

六年前にモンスターに襲われてぼろぼろの状態で倒れているところをウエンディに助けてもらい、そのまま化け猫の宿に入る。

ウエンディから向けられる好意に全く気付かないほどの鈍感。

シャルルが天敵。

ウエンディのことが好き。

魔法

空の造形魔法<スカイメイク>

簡単に言くと、空気で物を作る魔法。作ったものは虹色に輝く。

服装

白いフードつきの魔導着。下は黒い長ズボン。

決着！！妖精VS幽鬼（前書き）

「キャラ投票は好きなキャラクターの名前を感想に描いて送ってください！！」

B Y リヨウマ

決着！！妖精VS幽鬼

「海龍の……咆哮っ！！！」

ゴガアアアアアアア！！！！

全体攻撃で幽兵の数を減らしていく。

けどジョゼの魔法で生まれた奴らだから無限と断言していいほど復活してきやがる。

これじゃキリがねえな……

ズアアアアア！！！！

「っ！！！」

俺の背後に迫っていた幽兵が砂の竜巻によって消滅した。

「油断すんなリヨウマ！！！」

「さんきゅーマックス！！！」

俺にそういうマックスも魔力が底を尽きそうなのか顔にビッシリと汗が噴き出している。

他のみんなも辛そうだな……

ナツたちはまだ決着つけらんねえのか？

「！！ リヨウマ！！あれ見て！！！」

カードを手裏剣のように投げていたカナが突然動きを止めて俺の名

あれって……ファントムのギルドのことか？

「何も変化なくね？」

「あ。ホントだ」

アイツは【煉獄砕破】アビスブレイクの魔法陣を描いていたんだがその速度が落ちている。

なんで速度が落ちたんかな？

「キヤアア！！」

「おいテメエ!!!止めろ!!!」

「ギルドが壊れちゃう!!」

「なっ！？ 数が増加してるだ！？」

なんて卑怯な真似を……人の家に何しやがんだコラあ……………

「やああめえええええええろおおおおおおお！！！！！！！！」

「? ! ?」

「うあああああああああああああ！……！」

もう意識なんてとうにぶっ飛んてた。

痛みと疲労で体はふらふら。

でも……ギルドを護りたい気持ちが俺の動力源になって
いたんだ。

こおおおおおおおお……

湖の水が俺の口から全身に回っていく。

速く速く速く速く！！

叫べ海龍！！シーサー！！俺に力を！！

「うぐおおおがががああああああああああ……！！！」

「うぐおおおがががああああああああああ……！！！」

カナ——私は信じられないものを見ている気がした。

普段はエルザの尻に敷かれてみんなに優しくして私の憧れの人である
リヨウマ。

そのリヨウマが怒りに震えている。

それも本気の怒りだ。

滅龍魔導士つてのは普通の魔導士とは何かが違うらしい。

だからかもしれない。

今、私の目の前で怒りに震えているリヨウマが人間のものとは思え
ない声で叫んだ途端に私には見えた。

蒼くて長い体軀で四枚の翼があるトカゲのような生き物がリヨウマ
の体から放たれた瞬間を。

【ドラゴン】

そんな言葉が頭に真っ先に浮かんだった。

あれが……海龍シーサラ？

本物じゃないのは分かってる。

でも……今のリヨウマは人間と言われても分からないぐらいに怒り狂っていた。

ドラゴンと呼ばばしつくりとくる。

滅龍魔導士<ドラゴンスレイヤー>

その名前の本当の意味が初めて分かった気がした。

龍^{ドラゴン}の力を得た魔導士。

その逆鱗に触れたが最期、生きては帰れないという神話。
あれは神話なんかじゃなかったんだ………

「す……すげえ……」

「幽兵が一掃されたぞ……」

凄い……これがリヨウマの本当のチカラか……

こりゃ今後は怒らせないように注意しなくちゃね。

「まったく……また惚れさせるんじゃないよ／＼／／」

「――あ？　へっ？　今何が起きたんだ？」

さっきまでの記憶が全くない。
つていうか幽兵は！？
なんで一体も見当たらねえの？

「リヨウマ……覚えてないのか？」

「ああ。マックス、教えてくれ。今ここで何があったんだ？」

「詳しくは説明しづらいんだが。さっきお前は怒りで意識を失ったんだ。その後、お前の魔力がその……ドラゴンのようになって幽兵を一掃した」

「……………」
・はあ！？」

ドラゴン！？

なんで俺の魔力がドラゴンみたくなるんだ！？
不思議だ。

俺でもこの滅龍魔法はよく分かってない。
まだまだ不思議があるようだな……

「お、おい！！アレ！！」

「ん？　……………マジ？」

俺の目の前には信じられない光景が広がっていた。
ファントムのギルドが粉々に砕け散っているんだ。
あいつ等のギルドが壊れたってことは……

「勝った……のか？」

「……………うおおおおおおおおおお！！！！！！」

「……………フェアリーテイル妖精の尻尾の勝利だああああああ！！！！！！」

「」

みんなが飛んで跳ねて勝利を祝っている。

マジ……？ あのマスタージョゼを倒したってのか？

嘘マジええっ！？ 本当に！？信じらんねえ！！

「やったよりヨウマー！！私たちの勝利だ！！」

「あ？あ、ああ……」

「おいコラクソガキ！！もっと喜べって！！」

「ったく一番活躍したんだからもっとこう、はしゃげねえのか？」

ゲシゲシ

「痛い！！ こらあ！！俺はケガ人だぞ！？ もっと労われって！

！ってうわあ！？」

俺の抗議を完全にスルーしてみんなが俺を持ち上げた。

この感じは…… ってヤベエ！！

絶対に胴上げする気だ！！

そんなことを今の状況でされたら体に激しい痛みが走る！！

マズイマズイマズイ！！早く止めねえと——！！？

「……………よつしゃあ——！！！！」「」「」「」

「うわああああああ！！！！」

俺の周りに広がっているのは空。

完全に宙に浮いてます。

って高すぎだろ！！

どんだけ力こめたんだデメエら！！

って落ちてるうううううううう！！！！！！

めきよおお！！

変な音したぞ今。

[illegible]

確実にどっかの骨が折れたと確信しました。

「結局ギリギリの状態だのう……」

マスターが壊れたギルドを目の前にして呟きを漏らす。

俺の魔力が暴走して幽兵を一掃したとはいえ、それまでのダメージが消えるわけじゃない。

今にも崩れそうな妖精の尻尾のギルド。

俺はギルドをじっと見つめる。

すると、ふと頭の中に俺が妖精の尻尾に入った時の光景が鮮明に顯れた。

「うわあ……大きいギルドだ……」

「気に入ったかの？」

「うん!! ねえ、マカロフ。なんで妖精の尻尾って名前なの?」

『妖精には尻尾があるのかないのか……もつとも本当にいるのかどうかさえ誰にもわからない。だからこそ永遠の謎…永遠の冒険。そんな意味が込められておるのじゃ』

『よく分からないけどとにかく凄い！！俺、ここに入りたい！！』
『そうか。まだ建物しか見せておらんのじゃがな……』

あの時からまったく姿を変えたことが無かったギルド。

あの姿は幼かった俺の心を確実に射抜いていた。

だから許せなかったんだ。

ギルドを壊そうとするファントムの奴らが……

「あ……あの…マスター………」

「んー？ お前も随分大変な目に遭ったのう」

マスターの言葉に複雑そうな表情を浮かべるルーシー。

今回の事件の一番の被害者は彼女なのかもしれない。

自分の父親のせいで俺たちが傷ついたとか思ってるのかもしれないけど……それは間違ってる。

「そーんな顔しないの。ルーちゃん」

カッ カッ

そうルーシーに励ましの言葉をかけたのはガジルにボロボロにされたレヴィだった。

その後ろにはジェットとドロイとリーダスもいる。

「皆で力を合わせた大勝利なんだよ」

「ギルドは壊れちゃったけどな」

「そんなのまた建てればいいんだよ」

「ウィ」

「レビィちゃん…ジエツト・ドロイそれにリーダース……」

「心配かけてごめんね、ルーちゃん」

「違…う…それはあたしの……」

「話は聞いたけど誰もルーちゃんのせいだなんて思っ
てないんだよ」

「俺…役に立たなくて…あの…あの…ゴメン……」

「……………」

それでも尚、自分のせいだと自問するルーシィ。

彼女は罪悪感で押しつぶされそうなのかもしれない。

しかしそれは少しの誤解だ。

「ルーシィ」

マスターが優しい声色でルーシィに語りかけ始めた。

「楽しいことも悲しいことも全てとまではい
かないが、ある程度は共有できる。それがギルド
じゃ。一人の幸せはみんなの幸せ。一人の怒りは
みんなの怒り。そして、一人の涙はみんなの涙。
自責の念にかられる必要はない。君にはみんなの
心が届いているハズじゃ」

マスターの言葉がゆっくりと俺たちの心に染み
わたっていく。

ギルドの仲間の大切さ。

それを知ること
で本当の家族を知ることができる。

俺は昔マスターからそう教わった。

「顔を上げなさい。君は妖精の尻尾の一員なんだから」

「……………うう……………うわあ——ん……」

堪えていた涙を我慢するのをやめてルーシィが涙を流した。

「なあ、エルザ」

俺は隣でルーシィを見て微笑んでいるエルザに声をかける。
彼女も傷だらけであちこちに血がにじんでいる。

「なんだ？」

「お前は……妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士でよかったって思っているか？」
「ふっ……そんなもの言うまでもないだろう……」

エルザが勝ち誇ったような顔を俺に向けてくる。
「たく……コイツはいつもいつも素直じゃないんだから……」

「そうだな……考えるまでも無い」

素直じゃないのは皆同じ。

だからこそ俺は心の中でこう言おう。

『妖精の尻尾フェアリーテイルは最高だ』

と……

決着！！妖精VS幽鬼（後書き）

「家に…帰る　だそうだ」

B
y
エルザ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1118y/>

FAIRY TAIL ~ 海龍の二つ名を持つ者 ~

2011年11月24日15時45分発行